

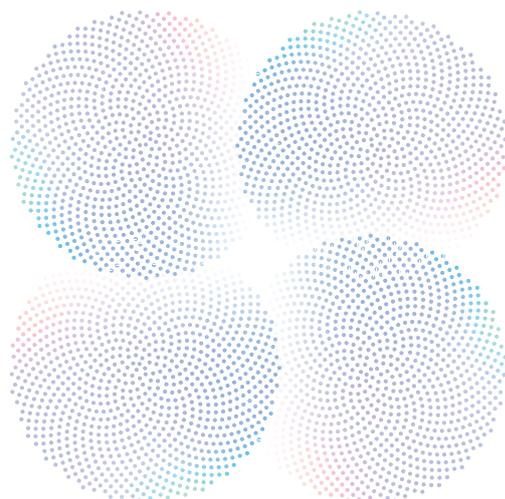
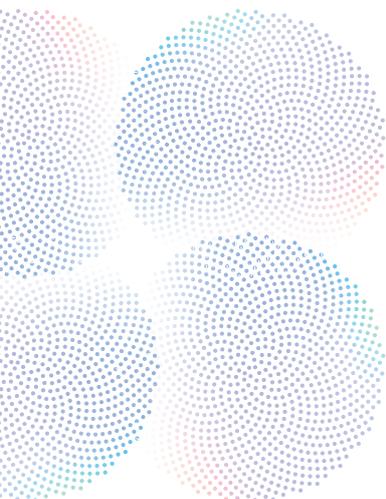
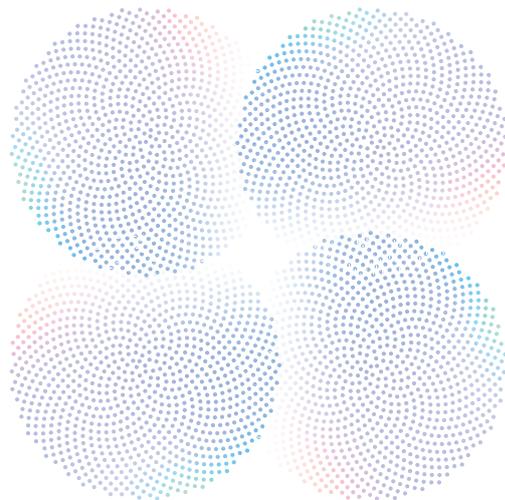
Kyoto University Executive Leadership Program

Lecture outline

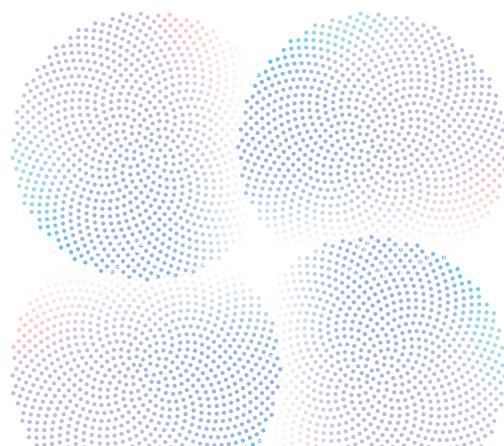
2022

京都大学
エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム

講義概要



未来を創るために、
ものごとの
根本を深く知る。
未来の源泉は、ここにある。



contents

総長よりご挨拶 湊 長博

前期

人文科学 赤松 明彦 [インド哲学]
芦名 定道 [キリスト教学]
上原 麻有子 [近代日本哲学]
小倉 紀蔵 [東アジア哲学・日韓関係]
佐伯 啓思 [現代文明論]
廣野 由美子 [19世紀イギリス文学]

社会科学 広井 良典 [公共政策]
森口 由香 [アメリカ外交史]
矢野 誠 [ミクロ経済学]

自然科学 金出 武雄 [ロボット工学・人工知能]
鎌田 浩毅 [地球科学]
坂口 志文 [免疫学]
滝田 順子 [小児がん]
橋本 幸士 [素粒子論]
平田 晃久 [建築学]
森 和俊 [分子生物学]
山極 壽一 [人類学、霊長類学]

複合領域 井上 恵美子 [環境経済学]
神谷 之康 [ブレイン・デューディング]
藤原 辰史 [食と農の思想]

芸術 杭迫 柏樹 [書道]
千 玄室 [茶道]
平川 佳世 [西洋美術]

後期

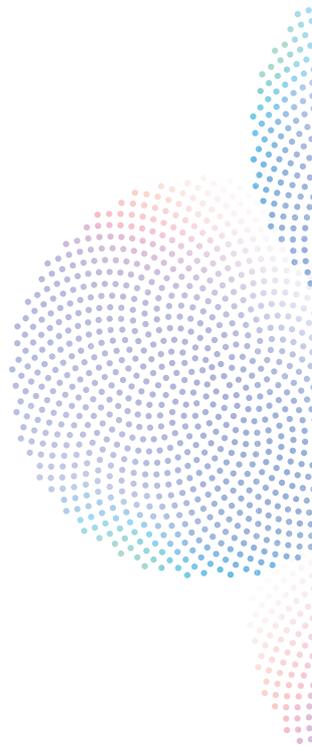
人文科学 ウスビ・サコ [空間人類学]
鈴木 晶子 [教育哲学]
東長 靖 [イスラーム研究]
西平 直 [教育人間学]
速水 洋子 [文化人類学]
松山 大耕 [禅]

社会科学 石井 美保 [人類学]
西谷 祐子 [国際家族法]
劉 徳強 [中国経済]

自然科学 伊藤 美千穂 [生薬学]
鹿島 久嗣 [人工知能]
北川 進 [無機化学]
田村 恵子 [緩和ケア]
土井 隆雄 [有人宇宙学]
益田 玲爾 [魚類心理学]
湊 長博 [免疫学]
森 重文 [代数幾何学]
渡邊 大 [生体情報科学]

複合領域 浅利 美鈴 [環境教育論]
塩瀬 隆之 [コミュニケーションデザイン]

芸術 池坊 専好 [華道]
金剛 永謹 [能楽]
樂 直入 [楽焼]



務本之学

「務本の学」とは、即ち「本(もと)を務むの学」。
先の見えない複雑な世界だからこそ、枝葉末節ではなく、
本質を理解する学問、務本の学が必要になります。

自然科学

社会科学

複合領域

芸術

人文科学

京都大学ELPの勧め

MINATO Nagahiro

京都大学
湊長博 総長

京都大学Executive Leadership Program（京都大学ELP）は、現在ビジネスや行政を始め多様な社会の第一線で活躍し、将来各界のリーダー人材として我が国の発展を担っていくことが強く期待されている皆様を対象に、学術・文化・芸術の都である京都の地で、本学を始め斯界を代表する当代第一人者による講義と直接対話を介して、幅広い知識と素養を体得していただくためのリーダーシッププログラムです。

本プログラムは、京都大学構内の由緒ある橘会館（110年前に竣工された旧帝国大学総長官舎）で行われ、2015年の開始以来昨年度までにすでにのべ100名を超える方々が受講参加され、非常に好評をいただいております。京都大学ELP受講者には京都大学総長より修了書を授与させていただくとともに、京大ELP倶楽部（同窓会）にお入りいただいております。京大ELP倶楽部はプログラム修了後も定期的に連絡を取り合い、特別講義や多様な催しを通して、異種業界間での交流や情報交換に大いに役立っているとうかがっています。

さて、今や企業はCorporate Social Responsibility（CSR）を求められ、Environment, Society and Governance（ESG）が企業投資の重要な指標とされる時代です。とりわけ複雑さを増しつつある国際社会のなかで、経済を始め様々な社会活動の健全なグローバル展開のためには、広汎な知的文化的素養に裏付けられた人と人との円滑なコミュニケーションの力は、一層その重要性を増していると言えるでしょう。

18世紀の（第3次）産業革命以降、科学と技術の急速な発達により世界の人々の生活は大きな進歩を遂げ、21世紀の今日、先進諸国ではIoTやAIなどの

新技術により超スマート社会の実現を目指す第4次産業革命の時代に入っています。他方で20世紀末から、世界の気候変動とこれに伴う大規模自然災害、地球環境破壊と生命多様性の危機、人間社会での多様なレベルでの格差の増大や食糧問題など、文字通り地球レベルでの課題が顕在化してきているのも事実です。

これら諸課題の要因自体は科学によって問うことはできますが、それにより容易に解決に至るとは考えられません。英国のJ. Ravetzらは、現代世界が直面している大きな問題は、事象自体の高度の複雑性とそれに係る利害の多様性によって特徴付けられ、「科学（Normal Science）によって問うことはできるが答えることのできない」領域に属しているとして、ポスト・ノーマルサイエンス（PNS）領域と呼んでいます。

現下の新型コロナウイルス感染症のパンデミックも、まさにPNS領域の問題と言えるでしょう。ウイルスの



特性や感染様式、宿主の免疫応答と病態発生機構などに係る科学的知見は急速に蓄積されてきてはいますが、もちろんこれが社会活動全般に統一指針を与えうる状況にはありません。この対策には、地域によって異なる社会習慣や宗教、他方では様々な社会活動や多様な職業によって異なる利害など、多くの要因が関係してきます。

例えばワクチンの問題があります。ワクチンには、ポリオや麻疹など集団免疫を目指すものと、インフルエンザなど個人の予防を対象とするものがありますが、新型コロナウイルスでは前者が想定されています。とすれば、大多数の人々がどうすればその安全性と効果を確信できるか、ワクチン接種の優先順位はどうあるべきか、集団免疫獲得に十分な割合(人口の7割以上)の接種が本当に実現可能か、などの問題があり、これには生活様式、歴史、宗教など多くの要素が関わってきます。

ビジネスや行政の世界において、複雑で混迷を究めつつある地球社会の中でこれからリーダーシップを取っていく人材には、自らが属する立場の直接利害に加えて、実に多様な観点からの知識や理解が要求されてくることになるでしょう。人口減少と超高齢化の進行が避けられない我が国で、ビジネスを含め新しいグローバル展開を進めていくに当たっては、学術・文化・芸術などに広い見識と理解をもったリーダー人材こそが今求められているのではないのでしょうか。

京都大学ELPが、来たるべき新時代の幅広い素養と知識を備えた社会のリーダー人材の要請に、そして何よりも受講される皆様の知の喜びと新たな出会いに、少しでも貢献できることを心から期待しています。



Category
人文科学
01

前期

寛容であるとはどういうことか

AKAMATSU Akihiko

ヒンドウ教を通して見る
多様性と寛容



赤松 明彦

京都大学白眉センター センター長
京都大学 名誉教授

講義概要

インドでは、紀元前500年頃から様々な宗教が共存してきた。そして原理主義が広がりを見せる現代においても通常は平穏に共存している。このような状況は「インド的寛容」と言われる。しかしこの「インド的寛容」は、他者の容認ではなく(もちろん排除でもなく)、単なる不干渉の態度だとも言われる。あるいは相対主義と言われることもある。相対主義はローカルな価値の多様性を積極的に認めるものであるが、その境界では干渉が生じ、対立が生まれるだろう。しかし価値が重層するインド社会では、その干渉が意図的でない限り対立は通常は生じない。本講義では、この「インド的寛容」についての様々な言説や事例の検討を通じて、寛容であることの意義を考えたい。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

寛容でありたいと思う。不寛容であることがあたかも正義であるかのような言説が横行し、容認と排除の単純な二項対立によってしか世界のあり方が語られないような現代において、寛容であることは如何にして可能か。不寛容の時代にあって、どうすれば寛容であり続けることができるのか。寛容であることは、社会的リーダーにとっては不可欠の徳目である。すなわち、社会的強者こそが寛容でなければならないのであり、それこそがリーダーの矜持というべきものであろう。インドでは、古代から、「弱肉強食」は非人間の原理とされてきた。そのインドでも昨今は不寛容の言説が横行している。真に多様性を認め合う社会の実現のためには、寛容の精神こそが不可欠である。

Profile

1953年京都府宇治市生まれ。1972年京都大学文学部哲学科入学。1981年、フランス政府給費留学生として京都大学大学院文学研究科からパリ第3大学第3期博士課程に留学し、1983年に同大学でインド学における博士号を取得した。帰国後、京都大学人文科学研究所助手を経て、1987年から九州大学文学研究科助教授、同教授。2001年～2018年京都大学大学院文学研究科教授。その間、2010年4月～10月文学研究科長・学部長。同年10月～2014年9月京都大学理事・副学長(学生担当)。2018年定年退職、名誉教授。現在、京都大学白眉センター長・特任教授。

著書に、『ヒンドウ教10講』岩波新書(2021年)、『インド哲学10講』岩波新書(2018年)、『バガヴァッド・ギーター:神に人の苦悩は理解できるのか? (書物誕生—あたらしい古典入門)』岩波書店(2008年)、『楼蘭王国:ロブ・ノール湖畔の四千年』中公新書(2005年)。サンスクリット原典からの翻訳書として、『古典インドの言語哲学 1,2』東洋文庫(1998年)など多数。

Category
人文科学

02

前期

生命の今とキリスト教思想

ASHINA Sadamichi

現代の生命論を再考する



芦名 定道

関西学院大学神学部 教授

講義概要

一九七〇年代以降、現代世界は、生命をめぐる新たな諸問題に直面している。日本の大学で、生命倫理あるいは環境倫理というテーマの授業が行われるようになったことはこの事情を反映している。生命科学の進展は人間の誕生から死までのさまざまな場面でそれまで人類が経験しなかった可能性(たとえば、脳死と臓器移植)をもたらし、それを社会的にルール化するために生命倫理の議論が開始された。ちょうどその頃、科学技術を基盤とした現代文明が引き起こした環境破壊は大きな問題となって顕在化した。それは環境倫理の対応を要求し、こうして生命は現代文明の最大の問題となった。本講義では、キリスト教思想の視点から問題状況を分析し、そこからいかなる展望が開けるかについて考察する。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

この講座では、生命をめぐる現代のキリスト教思想の議論を紹介しつつ、生命について再考することを試みたい。生命論理と環境倫理がさまざまな議論を闘わせている現代から、いかなる未来が展望できるだろうか。これはキリスト教思想の用語を用いるならば、終末の問いに他ならない。世界のキリスト教思想界では、この間、生命について多くの議論がなされてきた。その議論を参照することは、日本において生命の問題を根本的に再考し、新しい生命論を構築するために、重要な作業になるだろう。

Profile

1956年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(キリスト教)単位取得退学。京都大学博士(文学)。京都大学大学院文学研究科教授(キリスト教担当)を経て、現在は、関西学院大学神学部教授。

著書に、『自然神学再考 近代世界とキリスト教』(晃洋書房 2007年)『近代日本とキリスト教思想の可能性 二つの地平が交わるところで』(三恵社 2016年)など。

Category
人文科学

03

前期

「物となつて見、考え、行う」哲学

UEHARA Mayuko

ひもとき、世界を再考する
京都学派の技術知を

上原 麻有子

京都大学大学院文学研究科日本哲学史専修 教授

講義概要

「哲学」という学問は、日本では近代の黎明とともに西洋哲学を翻訳により導入することで開かれた。1930年代早くも、西洋最先端の哲学に決して引けを取らない、日本独自の哲学的立場を確立するに至ったのである。京都学派はその役割を担う代表的な知の集団であったと言える。講義では、学派の思想基盤となった西田幾多郎の哲学に焦点を当て、西田による「物を作る」ための技術論を紹介する。また、準備している課題は次の3つである。1. 西洋近代の哲学的パラダイムの乗り越え、2. 人間関係と社会・環境・世界の多様性に基づく西田的技術知の内実、3. 物作りの現実。「物となつて見、考え、行う」哲学は、今後の私たちの世界に何か貢献し得るであろうか。受講される皆様とともに考えてみたい。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

京都学派や西田の哲学が、経世済民であるとは言い難い。しかし1930-40年代、日本が完全に世界に組み込まれた現実のもと、哲学者たちは個人と全体(社会・環境・世界)の複雑に入り組み、矛盾の内在する関係性を、そういうものとして論理化した。あの昭和の歴史はまだ現代の社会・文化の土台としてリアルに生き続けている。パンデミック、地球環境の激変等により、私たちの世界観は大きく変わろうとしている。技術知は、当時の哲学者たちの予測を大幅に超えて、私たちの生活に幸福と危険の計り知れない矛盾をつきつけている。マニュアルはもう通用しない。しかし、やはり世界変革の歴史を生きた彼らの哲学は、それを更新し続ける思考の深め方、知恵を提供してくれるのではないか。

Profile

1994年、パリ第7大学テキスト文献学部修士号取得。2004年、フランス国立社会科学高等研究院博士号(哲学・翻訳学)取得。2005年、フランス大学助教授国家資格取得。2003年-2007年、リヨン第3大学外国語学部日本語学科任期付講師・研究員、および非常勤講師。2006年-2007年、ル・アーブル大学国際学部非常勤講師。2007年-2010年、明星大学日本文学学部言語文化学科准教授。2010年-2013年、同大学人文学部日本文学学科准教授を経て、現職。専門は近現代の日本哲学、翻訳学、女性哲学。

2012年より*Journal of Japanese Philosophy* (ニューヨーク州立大学出版) 編集長。2015年より西田哲学会理事、2021年より同学会編集委員長。2016年よりInternational Association for Japanese Philosophy理事。2017年より日本学術会議連携会員。2018-2019年、京都哲学会代表、会誌『哲学研究』編集責任者。2018年より日本哲学会の欧文会誌*Tetsugaku*編集委員長。2019年より同学会理事。2013年より西田・田辺記念講演会委員。2014年より暁烏敏賞選考委員会委員。2018年より西周賞選考委員。

「西田哲学の再解釈—行為的直観としての顔の表情」『思想』(2015年11月号)、「『女性哲学』へと向かう九鬼周造著『いき』の構造」、『幕末明治 移行期の思想と文化』(勉誠出版、2016年 共編著)、*Philosopher la traduction /Philosophizing Translation* (Nanzan Institute for Religion and Culture/Chisokudō Publications, 2017年 編著)、「Trends and Prospects in Japanese Philosophy After 1945: The Contemporary Philosophy of Hiromatsu Wataru from Marxist Philosophy to the Theory of Facial Expression」, *Contemporary Japanese Philosophy A Reader* (Rowman & Littlefield International, 2019年 共著)、「創造する翻訳—近代日本哲学の成長をたどって」『近代人文学はいかに形成されたか』(勉誠出版、2019年、共著)、「日本哲学の連続性」『世界哲学史8—現代グローバル時代の知』(ちくま新書、2020年共著)。

Category
人文科学

04

前期

日本文明論および日韓関係

OGURA Kizo

新しい生命論、群島文明論、
新しい東アジア

小倉 紀蔵

京都大学大学院人間・環境学研究所 教授

講義概要

この講義の1コマ目では、ふたつの別個のテーマを90分(45分+45分)でお話します。というのは、わたしの専門が①東アジア比較文明論②朝鮮半島問題および日韓関係、というふたつだからである。

前半は、「日本文明論」についてお話します。日本は伝統的に、大陸とは異なる「群島文明」を構築してきた地域だと考える。それを生命論のレベルでいうなら、人間が複数いる場所に偶発的に立ち現われる〈いのち〉を大切にす文明である。人類はこれまで、肉体的・生物学的な生命と、霊的・宗教的生命の2種類しか明確に認識してこなかった。しかしそれらとは根本的に異なる〈第三の生命〉というものがある。日本の群島文明は、この生命感覚によって成り立っている。

後半はその日本文明を、現在の朝鮮半島情勢および日本と朝鮮半島の関係において考察する。今後東アジアはどうなっていくのか。「新しい東アジア」の構築のために、これまでになく日本の役割が大きくなる。国際政治、外交や歴史認識、思想宗教も含めて、東アジアのなかの日本文明を考えてみる。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

まず前半の日本文明論で論じられる〈第三の生命〉は、これまで人類が明確に「生命」とは認識してこなかった現象に対する新しい解釈である。おそらく日本人は平安時代の「もののあはれ」「をかし」以来、このタイプの生命、つまり偶発的に立ち現われる美的な生命にきわめて敏感であった。生命を肉体的なもの、霊的なものから解放すもうひとつの通路を明確に認識することによって、現代社会のさまざまな問題や個人の生きにくさなどにも新しい回答が得られるだろう。後半の「新しい東アジアの構築」は、わたしたち東アジアに住む者がいま、もっとも真剣に考えるべき問いのひとつである。冷戦の時期には分断体制によって膠着化していた朝鮮半島がいま、きわめて流動化している。朝鮮半島が不安定になると、19世紀末の状況が再現されることになる。このときに日本はどのように行動すべきか。表面的・時局的な視点だけではなく、文明論的・歴史的視点からみなさんといっしょに考えてみたい。

Profile

1959年東京都生まれ。1983年東京大学ドイツ文学科卒業後、電通に勤務。1988年に電通退社後、韓国に留学。1993年ソウル大学哲学科修士課程修了(文学修士)、1996年同博士課程単位取得退学。1996年東海大学専任講師、1999年同助教授、2006年京都大学助教授を経て、2012年から現職。専門は朝鮮半島の思想・文化、東アジア哲学。NHKテレビ・ラジオハンゲル講座講師、「日韓友情年2005」実行委員、「日韓交流おまつり」実行委員、「日韓文化交流会議」委員などをつとめた。現代韓国朝鮮学会元会長、比較文明学会理事、地球システム倫理学会理事。

『韓国は一個の哲学である』『韓国人のしくみ』『韓流インパクト』『歴史認識を乗り越える』(以上、講談社)、『韓国、ひき裂かれるコスモス』(平凡社)、『心で知る、韓国』(岩波書店)、『韓国、愛と思想の旅』(大修館書店)、『おれちん』(朝日新聞出版)、『日中韓はひとつになれない』(角川書店)、『ハイブリッド化する日韓』(NTT出版)、『創造する東アジア 文明・文化・ニヒリズム』、『いのち』は死なない』(以上、春秋社)、『朱子学化する日本近代』、『北朝鮮とは何か』(以上、藤原書店)、『新聞・テレビが伝えなかった北朝鮮』(共著、角川書店)、『韓国語はじめての一步』『入門 朱子学と陽明学』『新しい論語』『朝鮮思想全史』『京都思想遺囑』(以上、筑摩書房)、『現代韓国を学ぶ』(共著、有斐閣)、『群島の文明と大陸の文明』『韓国の行動原理』(以上、PHP新書)など。

Category
人文科学
05

前期

日本の経済社会の将来を考える

SAEKI Keishi

「経済成長至上主義」という
価値観を再考する



佐伯 啓思

京都市人社会の未来研究院 特任教授
京都大学 名誉教授

講義概要

この講義は、ある特定の専門分野をテーマに講義するのではなく、今日の日本経済の状況とその将来の方向について、私自身の考えを述べ、それについて皆さんと議論したい。

今日の経済は、グローバル化とイノベーションによって激しい市場競争を展開しており、日本経済もこの競争のなかで、アベノミクスに示される経済成長路線をとっている。しかし、日本は、人口減少社会にはいり、また、いわば成熟社会になりつつある。果たして市場競争が日本人の「幸福」につながるかどうか疑問であり、経済成長主義とは異なった新たな方向を打ち出すべきではなからうか。本講義では、経済学、経済思想を検討しつつ、現代文明の在り方と日本社会の将来を論じてみたい。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

私は、政治や経済を中心して現代社会の在り方を、「現代文明論」として総合的に研究してきた。今日の世界は、グローバリズムという名のもと、アメリカを中心とした「近代主義」(合理的科学、自由と民主主義の政治、市場競争経済、技術革新、個人主義的な幸福追求など)に覆われつつあり、日本もこのアメリカ型近代主義に巻き込まれている。しかし、果たして、それは日本にとって「幸福」なのか、日本人の価値観の機軸はまた別にあるのではないか、という疑問もある。世界は本来は多様なものであり、それぞれの国の歴史的風土や文化のなかで政治や経済も機能するはずである。この講義(研究)は、その意味で、今日のグローバルな近代主義の反省にたつて、より健全な世界へとわれわれの思考を鍛えようとするものである。

Profile

1949年奈良県生まれ。東京大学経済学部卒業。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得。広島修道大学商学部講師、滋賀大学経済学部助教授、同教授を経て、1993年～2015年京都大学大学院人間・環境学研究科教授。2015年定年退職、名誉教授。現在、京都大学こころの未来研究センター特任教授。第4期文部科学省中央教育審議会委員。1985年『隠された思考』筑摩書房でサントリー学芸賞を受賞、1994年『「アメリカニズム」の終焉』TBSブリタニカでNIRA政策研究・東畑記念賞を受賞、1997年『現代日本のリベラリズム』講談社で読売論壇賞を受賞。2007年第23回正論大賞を受賞。共生文明学、現代文明論、現代社会論、社会思想史を研究テーマとし、現代社会を文明論的観点から捉え、政治、経済の分野を中心に広く評論活動をおこなっている。

『隠された思考』筑摩書房(1985年)、『「欲望」と資本主義』講談社現代新書(1993年)、『自由とは何か』講談社現代新書(2004年)、『倫理としてのナショナリズム』NTT出版(2005年)、『学問の力』NTT出版(2006年)、『日本の愛国心』NTT出版(2008年)、『反・幸福論』新潮新書(2012年)、『20世紀とは何だったのか』PFP文庫(2015年)、『さらば、資本主義』新潮新書(2015年)など多数。

Category
人文科学
06

前期

文学作品を深く読むこと
——
教養とは何か

HIRONO Yumiko



廣野 由美子

京都大学大学院人間・環境学研究科 教授

講義概要

本講義では、19世紀のイギリスの女性作家ジョージ・エリオットの代表作で、世界文学としても名高い小説『ミドルマーチ』を教材として用いて、文学作品を深く読む方法について学びます。まず、小説がどのような要素によって成り立ち、いかに仕組まれているかという技法的観点から切り込む方法として、「語りの形式」や「象徴」の読み解き方などについて考察します。次に、経済・社会・歴史・倫理・宗教・心理・教育・芸術といった〈教養〉の諸部門を取り上げて、それぞれの観点から、「人間とは何か」という問題が作品においてどのように追究されているかを、実例を挙げながら提示します。それによって、小説の奥に、いかに深くまで読み込むことのできる鉅脈が横たわっているか、多様な解釈の可能性が含まれているかが、明らかになるでしょう。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

〈物語〉は、世界や人間に関わるさまざまな問題について諸学問が理論的に明らかにしようとしていることを、生き生きとした具体的な実例として、私たちが切実に理解できるまで、真に迫った形で提示してくれます。のみならず〈物語〉は、諸学を個々ばらばらのものとしてではなく、根元の部分でつなぐ役割を果たします。それゆえ、文学ジャンルのなかでも、ことに人間を描くことに主眼を置いた物語形式である小説は、真の意味での〈教養〉を培ううえで、私たちに大きな力を与えてくれるのだと言えるでしょう。文学には、人間の生きる力の土台を形成する作用が含まれているといっても過言ではありません。

Profile

1958年大阪府生まれ。京都大学文学部(ドイツ文学専攻)卒業。神戸大学大学院文化学研究科博士課程(英文学専攻)単位取得退学。学術博士。専門は英文学、イギリス小説。山口大学教育学部助教授、京都大学総合人間学部助教授を経て、2008年より京都大学大学院人間・環境学研究科教授。2016～2019年、文部科学省科学官。日本ジョージ・エリオット協会会長、日本プロンテ協会理事、日本英文学会関西支部理事。NHK Eテレ「100分de名著」の「フランケンシュタイン」「高慢と偏見」にゲスト講師として出演。1996年、第4回福原賞受賞。

『小説読解入門—「ミドルマーチ」教養講義』(中公新書)、『批評理論入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』(中公新書)、『ミステリーの間学—英国古典探偵小説を読む』(岩波新書)、『深読みジェイン・オースティン—恋愛心理を解剖する』(NHK出版)、『謎解き「嵐が丘」』(松籟社)、『一人称小説とは何か—異界の「私」の物語』(ミネルヴァ書房)、『視線は人を殺すか—小説論11講』(ミネルヴァ書房)、『十九世紀イギリス小説の技法』(英法宝)など著書多数。訳書に、ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』1～4(光文社古典新訳文庫)、ティム・ドリン『ジョージ・エリオット』(彩流社)など。

生きる力の土台を形成する
物語の作用

Category
社会科学

01

前期

人口減少社会のデザイン

HIROI Yoshinori

拡大・成長から持続可能性へ

広井 良典

京大大学人と社会の未来研究院 教授



講義概要

日本は2011年から本格的な人口減少社会となり、現在の出生率が続けば日本の総人口は2050年過ぎには1億人を切り、さらに減少していくことが予測されています。これは人口や経済の規模が拡大を続けるという、明治以降100数十年にわたって続いてきた時代状況からの根本的な変化であり、「拡大・成長」を基調とする社会のあり方からの大きな発想の転換が求められています。まちづくりや地域再生、企業行動や経営のあり方、社会保障や世代間の配分、東京・地方や都市・農村を含む国土のビジョン等々はどのようなものであり、そこでの「豊かさ」は「価値」はどのように展望されるでしょうか。人類の歴史の中で的人口減少社会や資本主義のゆくえといった大きな視点も含め、人口減少社会のデザインを幅広い角度から考えてみましょう。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

日本は文字通り世界の「フロントランナー」として、人口減少あるいは超高齢化社会を経験していくこととなります。したがって、このテーマは令和時代の日本にとっての中心に位置する話題であるとともに、日本がどのようなビジョンを描き対応をしていくかは世界にとっても意味があると言えます。こうした問題意識も踏まえ、私たちの研究グループは、「2050年、日本は持続可能か」という問いを立て、日本社会が2050年に向けて持続可能であるためにはどのような対応が必要かという点を、最近関心が高まっているAIを活用して分析し、必要な政策を提言するなどしてきました。同時に、人口減少社会においては人々の意識や価値観、死生観等も大きく変容していくことが予想されます。未来に向けての日本社会の持続可能性にとって、人口減少社会をめぐる研究は最優先のテーマと考えられます。

Profile

1961年岡山市生まれ。1984年東京大学教養学部卒業(科学史・科学哲学専攻)、1986年同大学院修士課程修了後、厚生省勤務(1986～96年)を経て1996年より千葉大学法経学部助教授、2003年同教授。この間、2001～02年MIT 客員研究員。2016年4月より現職。専攻は公共政策及び科学哲学。「人間についての探求」と「社会に関する構想」を橋渡することが基本的な関心で、環境・福祉・経済が調和した「持続可能な福祉社会」を構想。社会保障、医療・福祉、都市・地域等に関する政策研究から、ケア、死生観等に関する哲学的考察まで幅広い活動を行っている。この間、教育再生懇談会委員、国際協力機構(JICA) 社会保障分野課題別支援委員会委員、内閣府・幸福度に関する研究会委員、国土交通省・国土審議会専門委員、内閣府・選択する未来2.0懇談会委員、経済産業省・地域の持続可能な発展に向けた政策の在り方研究会委員等多くの公職を務める。

『日本の社会保障』岩波新書(1999年)でエコノミスト賞、『コミュニティを問いなおす』ちくま新書(2009年)で大仏次郎論壇賞受賞。他の著書に『ケアを問いなおす』ちくま新書(1997年)、『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』岩波新書(2001年)、『死生観を問いなおす』ちくま新書(2001年)、『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』岩波新書(2015年)、『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社(2019年)、『無と意識の人類史』同(2021年)など多数。



森口 由香

京都大学大学院人間・環境学研究科 教授

講義概要

本講義は、拙著『文化冷戦と科学技術—アメリカの対外情報プログラムとアジア』に描かれた事例を紐解きながら、より本質的な問題として「科学技術と政治・社会との関係」や(特に20世紀後半を通してアメリカが主導した)「近代化の功罪」等について考えることを目的とする。具体的には、例えば以下のような問題について考察を行いたい。(ただしここに挙げたものに限らない。)

- ・「序章」にあるブルー・ノラトゥールの科学と政治をつなぐ「継ぎ目のない網の目」とは何か。
- ・文化史と政治史はなぜ分断されてきたのか。両者を架橋することにどのような意味があるのか。
- ・第3章、第4章で扱った原子力「平和利用」と核兵器開発との関係は。
- ・アメリカの原子力技術の輸出(日本へのGE社製軽水炉も含めて)の意味は。
- ・第7章で扱った宇宙開発について、現代の宇宙開発競争に通じるものは。
- ・パンデミックは、科学技術と社会の関係をどう変え、どのような教訓をもたらしたか。

Profile

大学を卒業して外資系企業で働いた後、アメリカの大学院に進学。修士号を取得して広島大学助手に就任しましたが、フルブライト奨学生として再び渡米し(今度は子連れで)、ミネソタ大学で博士号を取得。留学終盤に愛媛大学への赴任が決まり、13年勤務した後、5年前に京都大学に移籍。単線的に学者への道を歩まなかったことで実質的な研究生生活が短くなったものの、色々な風景を見て来たことは人生の財産になりました。

修士課程では外交文書を用いる「実証歴史学」の手法を実地に学び、首都ワシントン近郊で公文書館漬けの毎日を送りました。この時の経験が今日の私の研究を支えています。博士課程では「アメリカ研究」という学際的な分野で、公文書だけではなく日記・文学・聞き取り調査など、様々な手法を用いた歴史研究を学びました。「留学生」として特別扱いせず対等に扱ってくれた大学院生仲間、そして子育てと研究を両立する女性のモデルを示してくれた指導教員に感謝しています。

残りの研究人生で、やりたいことが多くあります。まず取り組んでいるのは「海洋史」のプロジェクトです。偶然の経緯から、四国の太平洋沿岸で遠洋漁業者への聞き取り調査を始めました。年配の漁業者のお話は、冷戦期の歴史を塗り替えるようなインパクトがあります。捕鯨⇒カツオ漁⇒マグロ漁と代々続いてきた船主さん・漁師さんとの対話をもとに、辺境の地や海の上で人生の大半を過ごしてきた人々の眼から見た歴史を書きたいと思っています。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

近年、すぐに見える形で「数値化」した成果を出すことが、全ての学問に求められる傾向がありますが、私の研究は最もそうした形で示にくい分野の一つかも知れません。目に見える「モノ」の開発とは異なり、歴史学が世の中に与えるインパクトは緩やかで、気付かないうちに起こります。少しずつ起きる地殻変動のように、いつの間にかジワジワと進行するパラダイムシフトの一角に、私の研究がほんの少し貢献できたら嬉しく思います。

歴史がHe + Storyとして(西洋)男性の英雄たちの物語であった時代から、「文化史」「社会史」「女性史」「環境史」などの諸分野が生まれたことで、国境が絶対不変の概念ではないことや、人種やジェンダーが社会的に構築されることや、科学が政治から中立ではないことが解き明かされてきました。これらの考え方が今では社会にかなり広く浸透していることが、歴史研究が残してきた「インパクト」ではないかと思えます。

Category
社会科学

03

前期

発展・成長への
エコシステム

YANO Makoto

エコシステム構築と
社会科学の素養の意義

矢野 誠

独立行政法人 経済産業研究所 理事長
京都大学経済研究所 特任教授
京都大学名誉教授

講義概要

バブル崩壊後、我が国の経済は長期停滞に陥り、30年以上が経過しました。最先端の科学技術を誇る我が国がそれを脱却できないのは、なぜでしょうか。本講義では、社会科学的素養が発展・成長ためのエコシステムの形成には不可欠という視点にたって、この問題を考えます。もともとエコシステムというのは、生命とその生存・進化をつかさどるシステムの総体のことです。それが適切にデザインされて、初めて、生命の維持・増殖が可能です。1990年代のアメリカのITビジネス界において、経済もビジネスも一つのエコシステムに支えられるという考え方がうまれました。この見方にそって、社会科学的素養とは何か、我が国の組織や経済の発展・成長を支えるエコシステムとはどんなものか、といった問題を考えます。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

本講義の根底には、「経済の健全な発展・成長を支えるためには、高質な市場が不可欠」という経済理論（市場の質理論）があります。わたくしは、この理論を提唱し、高質な市場を支えるエコシステムのあり方を研究してきました。エコシステムは一つの目的に沿ったシステムの総体です。したがって、システムのパーツの間に固定的な垣根が存在しては、適切なエコシステムは形成できません。停滞からの脱却には、自分が属する組織や経済・社会のどこに垣根があるのかを正確に知り、社会のニーズに応えられるエコシステムを再構築する必要があります。ニーズの解明、エコシステムのデザインに欠かせないのが、本講義で紹介する社会科学的素養です。

Profile

独立行政法人経済産業研究所理事長(2020年より)、日本学士院会員(2021年より)、京都大学経済研究所特任教授、京都大学名誉教授(2018年より)、上智大学特任教授(2019年より)。東京大学経済学部卒(1977年)。ロチェスター大学経済学大学院卒業後(Ph.D.、1981年)、コーネル大学助教授、ラトガース大学助教授、横浜国立大学助教授・教授、南カリフォルニア大学客員准教授、慶應義塾大学教授、京都大学経済研究所教授、経済産業研究所所長などを歴任。

Category
自然科学

01

前期

人工知能とそのインパクト

KANADE Takeo

人工知能とは何か、その技術の
考え方とインパクトを議論する

金出 武雄

カーネギーメロン大学 ワイタカー記念全学教授
京都大学高等研究院 招聘特別教授

講義概要

「人工知能」という言葉を聞かない日はないと言っていいほどのこの頃である。しかし、一般には、その技術的内容については深層学習・シングュラリティと言う言葉からの想像を超えない理解、その社会的インパクトについては懐疑論から極端な恐怖論までセンセーショナルな議論が多く見受けられるようである。このあたりについて、講義とディスカッションと、かつ講師の研究生活から得た発想法を通じて、より正確な理解と本質的な議論とを目指したい。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

人工知能は、「ひとが一般に知的と呼ぶ能力」を人工的に、現在では主にコンピュータによって実現しようとする科学工学の分野である。いくつかの領域ではすでに、人と同様、時には人以上の能力を持つものが現れている。その社会的インパクトは大きい。新しい機能や産業が人の生活を豊かにし、人の能力自体もその助けを借りて進み、これまで難しかった多くの問題の解決につながると思われる。一方、現在の多くの職業はAIによって置き換わる可能性は明らかであるし、人工知能が創造も含め人を超えたときには「人とは何か」という根源的な問い(一意的な回答はないだろうが)を発していると考えられる。

Profile

人工知能、ロボット、計算機視覚の研究者。1973年京都大学で博士号・助教授の後、1980年カーネギーメロン大学に移籍し、同大学ロボット研究所Directorなど歴任。400以上の論文と120,000回以上の参照数により、h-indexと呼ばれる論文インパクト指標において計算機科学分野TOP10(2020)に入る。主な研究成果は、世界最初の顔画像認識、MPEGなど動画処理における最も基本的なアルゴリズムであるLucas-Kanade法、1995年に最初にアメリカ大陸を横断した自動運転車Navlab5、第35回スーパーボウルで採用された33台のロボットカメラによる360度の視野回転のプレー再生システムEye Visionなど。京都賞、フランクリン財団パワー賞、米国計算機学会/人工知能学会アレン・ニューウェル賞、米国電気電子学会Founders Medal、日本人工知能学会功績賞など。文化功労者、日本学士院会員、米国工学アカデミー外国特別会員。

Category
自然科学

02

前期

日本の地下で何が起きているのか

KAMATA Hiroki

地球科学で地震噴火の
活動期を賢く生き抜く

鎌田 浩毅

京都大学レジリエンス実践ユニット 特任教授
京都大学 名誉教授

講義概要

近ごろ頻発する地震と噴火は、2011年の東日本大震災が引き金となって地盤が不安定になったからである。日本列島は1000年ぶりの「大地変動の時代」に突入し、内陸の直下型地震と火山噴火が数10年ほど続き、西暦2030年代には南海トラフ巨大地震が予想され、全人口の半数6000万人が被災する。東日本大震災の10倍以上の被害をもたらす、いわば「西日本大震災」に今から準備しなければならない。さらに、富士山を初めとして20座の活火山が活動期に入ったことも懸念され、首都直下地震とともに我が国の喫緊の課題である。昨今、地球温暖化で気象災害が激化しているが、地球科学的には脱炭素の政策は大噴火のもたらず地球寒冷化でひっくり返る可能性もある。

講義では最先端の研究成果に基づく地下の状況を、市民の目線で分かりやすく解説する。どうやって命を守るのか、いま何を準備すべきか、どのような社会を構築すべきか、等々。

私は24年間の教授としての研究・教育活動を経て、2021年4月から京都大学レジリエンス実践ユニット特任教授に着任した。地球科学の基礎研究者から「科学の伝道師」にシフトした目的と経緯と方法論も、熱く語りたい。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

地震と噴火を伝えるアウトリーチ(啓発・教育活動)では、必ず生じる「心の葛藤」がある。同僚学者の目が気になって「後ろ指をさされない」ように説明するからだが、こうした「守りの姿勢」で語った結果、市民には臍に落ちない解説となる。反対に、私が市民の目線で解説と提言を行うと、同業者から「ちょっと正確さに欠けるね」と冷ややかな反応が返ってくる。ここで私に「市民サイドに沿う不安はない」と言ったら嘘になる。しかし、「科学の伝道師」はこの不安に打ち勝って成り立つ仕事なのだ。伝えたいことは至ってシンプルで、自然の一部である人間は自然を到底コントロールできない。一方、知恵を絞れば災害を減らすことは可能で、ここに地球科学の出番がある。

そもそも私が研究できるのは、社会へいずれ還元させていただくからではないか。地球科学の「知識」を人の命が助かる「行動」まで繋げるには新しい方法論が必要なのだが、いま私が格闘する最大のテーマでもある。「京大人気No.1教授」24年+名誉教授1年をフルスロットルした白熱 課外講義。

Profile

1955年生まれ。筑波大学付属駒場高校卒業。東京大学理学部地学科卒業。通産省(現・経済産業省)主任研究官・米国内務省カスケード火山観測所上級研究員を経て、1997年～2021年に京都大学大学院人間・環境学研究所教授。理学博士(京都大学)。専門は地球科学・火山学・科学コミュニケーション。内閣府災害教訓継承分科会委員、気象庁活火山改訂委員、日本火山学会理事、日本火山学会誌「火山」編集長、日本地質学会火山部会長などを歴任。日本地質学会論文賞受賞(1996年)、日本地質学会優秀講演賞受賞(2004年)。テレビ・雑誌・新聞・著書で科学を明快に解説する「科学の伝道師」。京大の講義は毎年数百人を集める人気で教養科目1位の評価を得てきた。「世界一受けたい授業」「情熱大陸」「ようこそ先輩 課外授業」「グレートネイチャー」などに出演。

『成功術 時間の戦略』文春新書(2005年)、『火山噴火』岩波新書(2007年)、『世界がわかる理系の名著』文春新書(2009年)、『京大人気講義 生き抜くための地震学』ちくま新書(2013年)、『火山はすごい』PHP文庫(2015年)、『地球の歴史、上中下』中公新書(2016年)、『地学ノススメ』ブルーバックス(2017年)、『日本の地下で何が起きているのか』岩波科学ライブラリー(2017年)、『地球とは何か』サイエンス・アイ新書(2018年)、『理科系の読書術』中公新書(2018年)、『座右の古典』ちくま文庫(2018年)、『読まずにすませる読書術』SB新書(2019年)、『富士山噴火と南海トラフ』ブルーバックス(2019年)、『新版 一生モノの勉強法』ちくま文庫(2020年)、『理学博士の本棚』角川新書(2020年)、『理系的アタマの使い方』PHP文庫(2021年)、『100年無敵の勉強法』ちくまQブックス(2021年)、『武器としての教養』MnN新書(2022年)など。共著に『一生モノの英語勉強法』祥伝社新書(2015年)、『山極寿一×鎌田浩毅 ゴリラと学ぶ』ミネルヴァ書房(2018年)、『野田秀樹×鎌田浩毅 劇空間を生きる』ミネルヴァ書房(2018年)など。

Category
自然科学

03

前期

自己と非自己の免疫学

SAKAGUCHI Shimon

新しい免疫医療に向けて



坂口 志文

京都大学名誉教授 大阪大学名誉教授
京都大学ウイルス再生医科学研究所 客員教授
大阪大学免疫学フロンティア研究センター 特任教授

講義概要

免疫系は、私たちの身体を病原微生物から守りますが、身体を作っている正常な細胞、分子とは反応しません。では、免疫系は、自己と非自己をどのように区別しているのでしょうか。この“免疫的自己・非自己”を区別する仕組みが分かれば、自己免疫病やアレルギーの理解が進み、治療・予防が可能になります。また、自己から発生した“自己もどき”である癌細胞に対して強い免疫反応を起こすことが可能となり、移植臓器をあたかも自己臓器として受容させることが可能となるでしょう。私たちが共生している腸内細菌も“自己もどき”であり、健常人では免疫反応が起こりません。免疫反応が起これば炎症性腸炎の原因となります。このような免疫的自己・非自己という概念をもとに新しい免疫医療の現状と展望について講義します。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

日本も含めて先進国では、最近のがん免疫療法の実用化の様子に、免疫の潜在能を媒介とした様々な疾患治療法の研究、臨床応用が進んでいます。一方、先進国では感染症をコントロールできる様になり感染症の頻度が下がるに従って、近年自己免疫病、アレルギー、炎症性腸炎などの免疫疾患が増えてきています。衛生的な環境では強い免疫反応を起こす必要がなくなり、免疫系が「鍛えられない」結果、このような免疫疾患が増えてくるのかもしれない。このようなパラドックスを考察しながら、先進国、発展途上国を問わず、医学・医療の未来はどうあるべきか、議論したいと思います。

Profile

1976年京都大学医学部卒業。京大病理、愛知癌センター研究所、京大免疫研究施設を経て1983年医学博士取得。1983年よりJohns Hopkins 大学、Stanford 大学博士研究員(Lucile P. Markey Scholar)、1989年Scripps 研究所、カリフォルニア大学サンディエゴ校 Assistant Professor、1992年科学技術振興事業団「さきがけ」研究専任研究員、1995年東京都老人総合研究所免疫病理部門・部門長、1999年より京都大学再生医科学研究所教授、2007年より同研究所長、2011年4月より大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授、2016年より大阪大学名誉教授、京都大学名誉教授。2004年William B. Corey Award、2008年慶応医学賞、2009年紫綬褒章、2012年学士院賞、同年米国科学アカデミー外国人会員、2015年Canada Gairdner International Award、同年Thomson Reuters 引用栄誉賞、2017年Crafoord Prize、2017年文化功労者、2019年英国Birmingham 大学名誉医学博士、2019年文化勲章、2020年Paul Ehrlich and Ludwig Darmstaedter Prize、その他受賞多数。2016～2018年日本免疫学会理事長。

Category
自然科学
04

前期

子どものがん

TAKITA Junko

子どものがんを克服するための挑戦



滝田 順子

京都大学大学院医学研究科発達小児科 教授

講義概要

小児期に発症するがんの本邦における発生率は、年間約2,500人であり、成人がんと比較すると極めて稀である。しかし、小児がんは、本邦において小児期の主要な死亡原因となっている。従って、小児がんの克服は、少子高齢化が進行する本邦において、早急に取り組むべき重要課題と言える。小児がんの中でもとりわけ遠隔転移や再発を来す例は依然として予後不良であり、有効な治療法は確立されていない。これらの難治例に対して現時点では、救命が最優先事項であり、強力な治療がなされているが、救命しえたとしても重篤な晩期合併症が深刻な問題となっている。希少疾患ゆえに認知度が低い小児がんの現状、課題、克服のために進められている研究について概説する。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

現在、国内の小児がんサバイバーは5万人に達すると推計されており、今後増加することが見込まれている。小児がんサバイバーが増加するにつれ、QOLを著しく損なう晩期合併症が深刻な社会問題となっている。これらのがんサバイバーは、複数科の定期的な受診がほぼ一生必要であり、一人当たりの医療費は健康な国民と比較すると膨大な額にのぼる。小児がんに対して分子病態に立脚した合理的な治療法の開発がなされれば、重篤な晩期合併症の回避をもたらし、医療費削減が期待できる。単に小児がんの治療成績の向上のみならず、がんサバイバーのQOL向上をももたらし、健全な若年者の育成、ひいては生産人口の増生につながり、社会福祉の向上に与えるインパクトは大きい。

Profile

1991年日本医科大学医学部卒業。同年、東京大学医学部小児科入局。1992年焼津市立総合病小児科医員。1993年国立がん研究センター研究所生物学部リサーチレジデントに就任後、小児がんの基礎研究に着手。1996年東京都立駒込病院小児科医員。2000年東京大学医学部附属病院小児科医員、2003年同助手、2005年同無菌治療部講師。臨床の傍ら、基礎研究を継続し、小児固形腫瘍の代表である神経芽腫におけるALKの異常を発見する(Takita et al., Nature, 2008)。2013年東京大学大学院医学系研究科小児科准教授、2018年京都大学大学院医学研究科発達小児科教授に就任し、現在に至る。東京大学医師会賞、日本小児科学会研究学術賞、日本癌学会 JCA-Mauverny Award、JCA女性科学者賞など受賞。

Category
自然科学

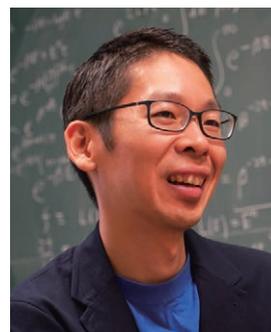
05

前期

宇宙を支配する数式

HASHIMOTO Koji

宇宙のすべてを解き明かす素粒子物理学、
その現状と課題、超ひも理論へ。



橋本 幸士

京都大学大学院理学研究科 教授

講義概要

この宇宙、そして物質と力、は究極のところ、何からできているのでしょうか。我々人類は、素粒子物理学を用いて、この宇宙がたった一つの数式で支配されていることを突き止めました。この数式は、素粒子の標準模型(にアインシュタインの一般相対性理論を加えたもの)と呼ばれ、人類の英知の結晶です。本講座では、この数式をまず書いてみることから始め、数式のそれぞれの項の意味、そしてその意義を解説します。また、暗黒物質やニュートリノ振動現象など、数式では説明しきれない宇宙の謎についても述べます。これらを解決するのは、「素粒子が小さなひもである」という仮説「超ひも理論」なのでしょうか。まだ、宇宙を支配する数式は、完成していないのです。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

素粒子物理学が明らかにした、極微の世界を記述する量子力学、そして極大の宇宙を記述する相対性理論、これらは100年前に作られ、現在の電子機器や衛星宇宙技術などの基盤として人間の生活を支えています。役に立つまで1世紀かかる研究は、自分の人生という尺度では測れない普遍的な価値を生むものです。素粒子物理学は、世界の成り立ちを知る学問であり、現在人類が到達した最高地点の科学です。これを知った人は、世界を見る方法じたいが変わるでしょう。

Profile

理論物理学者。1973年生まれ、大阪育ち。2000年京都大学大学院理学研究科修士、理学博士。2000年サンタバーバラ理論物理学研究所研究員、2001年東京大学助手、2010年理化学研究所准主任研究員(橋本数理論物理学研究室主宰)、2012年大阪大学教授などを経て、2021年より現職。専門は理論物理学、素粒子論、超ひも理論。世界各国で100以上の招待講演、現在は湯川秀樹が拓いた研究室の後任教授として教鞭を取る。日本物理学会理事。執筆教科書に『Dブレーン:超弦理論の高次元物体が描く世界像』(東京大学出版会)、共著に『ディブラーニングと物理学』(講談社)など。一般向け著書に『物理学者のすごい思考法』(集英社)、『超ひも理論をパパに習ってみた』『「宇宙のすべてを支配する数式」をパパに習ってみた』(講談社)など。季刊『kotoba』にエッセイを連載中。サイエンスとアートをつなぐ活動を行い、出演したパフォーマンスアート作品“Every day is a new beginning”で Art Innovation 2019国際会議にて京都大学総長賞を受賞。

Category
自然科学
06

前期

〈からまりしろ〉としての建築

HIRATA Akihisa

生命のような建築をつくることは可能か

平田 晃久

京都大学大学院工学研究科 教授



(c)Luca Gabino

講義概要

かつて昆虫少年だった私は、昆虫たちが生きている自然環境と、自分たちが生活している建物の空間がどうしてこんなに違うのだろう、と思っていました。建築はもっと自然環境のような質を獲得できるはずであり、人間たちは自らの動物的本能を呼び覚まされるような都市・建築環境の中で、もっと生き生きと活動できるはずなのです。建築を自然と対立する人工物としてではなく、生態系の一部として根本的にとらえなおすこと。〈からまりしろ〉(=からまる余地[しろ])はそんな建築のための造語です。一本の樹木に鳥たちがからまるように、人間が自らの場所を見出せる、〈からまりしろ〉としての建築がつくれないか。そんな問いから生まれた様々な建築の実践を紹介したいと思います。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

〈からまりしろ〉の概念は、均質でコントロール可能な「空間」を標榜してきた前世紀的な建築を越え、より立体的で自然環境のような質を持った建築や都市環境が生まれるための理論的支柱です。

それは、第一義的には従来と異なる三次元的で自然的要素とからまり合う新しい建築形態とつながります。また、市民ワークショップを通じてつくった公共建築などの実践において、様々な人々の思いとからまり合う建築も生まれつつあります。

人間の精神は自らをとりまく環境と互いに映し合い影響し合います。生態系とからみ合う新しい社会は、建築や都市環境の新たな発展と共にあり、〈からまりしろ〉の建築はそのような発展に寄与するものと信じます。

Profile

1971年大阪府に生まれる。1997年京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所を設立。現在、京都大学教授。

主な作品に「樹屋本店」(2006)、「Bloomberg Pavilion」(2011)、「太田市美術館・図書館」(「Tree-ness House」(2017)、「八代市民俗伝統芸能伝承館」(2021)等。第19回JIA新人賞(2008)、第13回ベネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞(2012日本館での共働受賞)、村野藤吾賞(2018)等多数受賞。著書に『Discovering New』(TOTO出版)、『JA108 Akihisa HIRATA 平田晃久2017→2003』(新建築社)等。また、バウハウス(ドイツ)、ハーバード大学(アメリカ合衆国)、Architecture Foundation(イギリス)等で講演。そのほか、東京、ロンドン、ベルギーなどで個展、MoMAにて「A Japanese Constellation」展(2016)を合同で開催。

Category
自然科学

07

前期

小胞体ストレス応答

MORI Kazutoshi

私達の細胞が持っている驚異の復元力



森 和俊

京都大学大学院理学研究科 教授

講義概要

生き物の基本単位は細胞で、その中に存在する最重要物質は、DNA(遺伝物質)とタンパク質(生命活動の担い手)です。生命活動の基本はDNA に書き込まれた暗号を解読してタンパク質を正しく作りつづけることと言っても過言ではありません。また、体内には多数の臓器が存在する様に、細胞の中には小さな臓器(細胞内小器官)が多数存在し、役割分担しています。小胞体は細胞内小器官の一つで、タンパク質の製造工場という役割を果たします。この工場はかなり優秀ですが、それでも時にうまく機能しなくなり、不良品タンパク質がいつも以上にできてしまうことがあります。この状態を小胞体ストレスと呼んでいます。この悪くなった状況を元に戻そうとする細胞の復元力(小胞体ストレス応答)の仕組みと意義をお話します。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

小胞体ストレス応答は、生命活動の担い手であるタンパク質の立体構造を保証することによって、様々な生命現象や生物進化を裏から支えていることが明らかになってきました。小胞体ストレス応答が働かないと私達は生まれてくることさえできません。小胞体ストレスもしくは小胞体ストレス応答が様々な病気の発症や進展に関与すると考えられています。糖尿病、アテローム性動脈硬化、パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症などの神経変性疾患、心不全や心筋症、肥満や代謝性疾患、炎症性腸炎、がんやウイルス感染等です。私達基礎研究者が解明した仕組みを使った創薬が始まっています。この応答は老化にも関与しており、健康寿命を延ばすことができるようになるかもしれません。

Profile

1958年岡山県倉敷市生まれ。1981年京都大学薬学部卒業。1983年京都大学大学院薬学研究所修士課程修了。1985年京都大学大学院薬学研究所博士課程退学。1987年京都大学薬学博士。1985年岐阜薬科大学助手、1989年米国テキサス大学博士研究員。1993年エイチ・エス・ピー研究所副主任研究員・主任研究員。1999年京都大学大学院生命科学研究科助教授。2003年より京都大学大学院理学研究科教授。小胞体ストレス応答研究の開拓者として、2005年米国ワイリー賞、2006年日本生化学会柿内三郎記念賞、2008年大阪科学賞、2009年カナダガードナー国際賞、2010年紫綬褒章、2012年上原賞、2014年朝日賞、アルバート・ラスカー基礎医学研究賞、香港ショウ賞、2015年トムソン・ロイター引用栄誉賞、2016年恩賜賞・日本学士院賞、2017年ブレークスルー賞、2018年文化功労者、2019年安藤百福賞大賞。

Category

自然科学

08

前期

人類の進化と 文化のミスマッチ

YAMAGIWA Junichi



山極 壽一

総合地球環境学研究所 所長
京都大学 名誉教授
前京都大学 総長

講義概要

現代は人新世と言われ、地球環境が大きく破壊される危機の中でこれまでとは全く違った暮らし(ニューノーマル)を組み立てねばならないと考えられている。そのためには、人類の歴史を有史以前に遡り、生物としての進化史を類人猿と比べ、人類がどのような心身の変化を経験して現代に至ったかを概観する必要がある。その上で、農耕・牧畜開始以来の文明史の中で人類が道を踏み外したと思われる点を探し出し、情報通信機器が急速に発達し、超スマート社会を迎えるなかで人間の心身と人工的な環境との間でどんなミスマッチがあるかを考察する。さらに、10年後、30年後の未来にふさわしい幸福な社会とは何かを考えてみることにする。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

今、人間の歴史を見直す作業に注目が集まっている。それは人間と社会がどのようにできたのか、これからどのように行っていくかについて信頼できる見取り図が描けないからである。さらに地球の平均気温の上昇によって自然災害が頻発し、カーボンニュートラルやSDGsなど地球規模で待ったなしの対策が迫られている。そこで、人間の歴史を有史以前に引き伸ばして考えることによって、人間と社会の本質を明らかにし、人間にとって真の幸福とは何かを問うことにする。それは、未来社会を具体的に構想するうえで大きな一助になるだろう。

Profile

総合地球環境学研究所所長、京都大学名誉教授。1952年東京生まれ。京都大学理学部卒業、同大学院理学研究科博士後期課程退学。理学博士。カリソケ研究センター客員研究員、(財)日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科教授などを経て2020年まで京都大学総長。国立大学協会会長、日本学術会議会長、総合科学技術・イノベーション会議議員、国際霊長類学会会長を歴任。現在、京都市動物園名誉園長、日本学術振興会評議員、環境省中央環境審議会委員、大阪・関西万博シニアアドバイザーなどを務める。1978年よりアフリカ各地でゴリラの野外研究に従事。類人猿の行動や生態をもとに初期人類の生活を復元し、人類に特有な社会特徴の由来を探っている。

人類の進化史と文明史を遡り、
どこで間違ったかを探り当て、
未来社会を展望する

Category
複合領域

01

前期

気候変動の経済学

INOUE Emiko

脱炭素社会実現に向けたイノベーション戦略



井上 恵美子

京都大学白眉センター／経済学研究科 特定准教授

講義概要

気候変動に起因する自然災害などの諸問題が世界で多発し、甚大な被害をもたらしている。この問題の解決や緩和のためには、パリ協定の目標の達成が重要であり、日本をはじめ主要国は具体的な施策を提示し、カーボンニュートラルを宣言している。ただ本質的に温室効果ガスの大幅削減は容易ではなく、低炭素技術などのイノベーションの役割にますます注目が集まっている。

本講義は、気候変動を経済学的視点から理解することを目的とする。気候変動によるリスクを科学的見地から整理し、その解決や緩和に期待されているイノベーションに焦点を当て考察していく。実際の政策と主要分野の研究開発進捗を分析し、イノベーションをより促進するための戦略も議論する。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

パリ協定の目標達成やカーボンニュートラルの実現は、将来世代のためにも重要な課題である。そのために必要不可欠な低炭素技術などのイノベーションを創出、そして促進するためのメカニズムを考察することは、今後の政策や、研究開発の主な担い手となる企業の取組に新たな視点や方向性を示す。

またパリ協定の温度目標など具体的な中長期目標を意識し、理論と実証に裏付けられた科学的見地から気候変動を把握することは、この課題を自分の問題として捉える契機となり、目標実現のために現時点ではどのように対応すべきかという思考を可能にする。このような科学的知見に基づく一人ひとりの行動変容は新たな潮流を生み出し、さらには国際間の協力や取組にもつながると考える。

Profile

University of Oxford (MSc in Environmental Policy)、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了(博士(経済学))、日本学術振興会特別研究員DC2。京都大学大学院経済学研究科講師を経て、現在、京都大学白眉センター／経済学研究科 特定准教授。専門は環境経済学、環境政策。

経済発展と環境保全の両立を可能にする「持続可能な発展」を実現するための方策について、環境経済学の視点から研究している。近年はその方策の一つとしてイノベーションに注目し、気候変動下における政策や企業の環境対応がイノベーションに与える影響に関して分析している。

Category
複合領域

02

前期

脳の暗号を解読する

KAMITANI Yukiyasu

他者から見える世界を知ることができるか



神谷 之康

京都大学大学院情報学研究所 教授

講義概要

われわれは外界からの入力がなくとも想起したり夢を見たりすることができます。見ている世界も、外界の単なるコピーではなく、主観に彩られています。脳は、外界を独特な仕方です内在化した世界のモデル(ニューロバース)を構築しており、脳信号はニューロバースをコード化している「暗号」とみなすことができます。私の研究室では、脳信号パターンから心の状態に関するさまざまな情報を解読(デコード)する方法を開発してきました。本講義では、ニューロバースの外在化・共有化という観点から脳情報解読研究を俯瞰し、脳科学が生み出す未来を展望したいと思います。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

インターネットやスマートフォンなど新たな情報通信技術が、多様なコミュニケーションを可能にしました。しかし、超えられていない壁があります。それは「身体」です。われわれが情報を発信するとき身体(筋肉)を動かす必要がありますが、筋肉とつながっている脳部位はごく一部です。その限られたチャンネルを通して、脳は世界とつながっているのです。しかし、脳情報解読技術は、そのボトルネックを超える脳と世界のブロードバンド通信を実現します。これによって、他人が経験している世界を可視化し、共有することができるようになるかもしれません。また、自分自身も意識していない・覚えていない情報を解読することにより、自己の深層を知る手がかりが得られるかもしれません。このような技術は、人間の文明や文化にどのような影響を与えるでしょうか。

Profile

奈良県生まれ。東京大学教養学部卒業。カリフォルニア工科大学でPh.D.取得後、ハーバード大学、プリンストン大学、ATR脳情報研究所を経て、2015年から現職。機械学習を用いて脳信号を解読する「ブレイン・デコーディング」法を開発し、ヒトの脳活動パターンから視覚イメージや夢を解読することに初めて成功した。SCIENTIFIC AMERICAN誌「科学技術に貢献した50人」(2005)、塚原伸晃賞(2013年)、日本学術振興会賞(2014年)、大阪科学賞(2015)等を受賞。2018年、ATRフェローの称号を授与される。サーバンタイン・ギャラリー(ロンドン)でのピエール・ユイグの展示「Umwelt」(2018年)のための映像を提供するなど、アーティストとのコラボレーションも進めている。

Category
複合領域

03

前期

現代史概論

FUJIHARA Tatsushi

20世紀を多角的にとらえる



藤原 辰史

京都大学人文科学研究所 准教授

講義概要

参加者には事前に、『〇〇の20世紀』という新書を書くとしたら、どんなタイトル&副題にし、どんな内容にするか、考えてもらい、それを発表いただいた上で、20世紀の輪郭を掴んでいきます。私は、トラクターという20世紀の人口爆発をもたらした農業機械に着目し、20世紀を概観してみます。このようなプロセスを経て、多角的に、かつ生活の延長として歴史をとらえる方法を考えてみたいと思います。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

この研究は、高校までの社会で学んだ歴史を、もっと深く、広く、自分の関心の延長として捉えるものです。そのような教養を身につけることで、中東や東欧、南米など「遠い」地域で起こる問題を自分の問題として考え、地球規模の思考をすることが可能になり、それが、世界を単なる「マーケット」や「資源のありか」としてしか捉えられない貧しい世界観を変えることにつながります。

Profile

1976年生まれ、2002年、京都大学人間・環境学研究所中退、同年、京都大学人文科学研究所助手、東京大学農学生命科学研究科講師を経て、2021年4月現在、京都大学人文科学研究所准教授。主な著作に『ナチスのキッチン』（共和国、河合隼雄学芸賞）、『分解の哲学』（青土社、サントリー学芸賞）、『縁食論』（ミシマ社）、『農の原理の史的研究』（創元社）など。2017年には日本学術振興会賞もを受賞。

Category

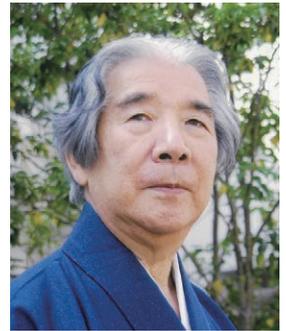
芸術
01

前期

書へのいざない

KUISEKO Hakuju

文字の美しさは一国の文化のバロメータ



杭迫 柏樹

日展 名誉会員

講義概要

1、理論

- A 書道史
- B 書論
- C 過去・現在・そして未来を考える

2、実技 座右の銘を書く



Profile

1934年生。京都学芸大学美術科(書専攻)卒。日展理事、日本書芸院名誉顧問、現代書道二十人展メンバー。2005年日展内閣総理大臣賞、2008年日本藝術院賞、2012年京都市文化功労者顕彰、2021年京都府文化特別功労賞、2021年旭日小授章。

『王羲之書法字典』二玄社(1987年)、『中国法書ガイド』二玄社(1988年～)、『NHK趣味悠々・暮らしの中の書』NHK出版(2001年)、『想いを送る年賀状一筆と墨のメッセージ』二玄社(2005年)ほか多数。

主なパブリックコレクションに、メトロポリタン美術館(USA)ボール・コレクション(スイス)、上海博物館(中国)、王羲之墓(中国)、各国日本文化会館・文化交流館、各国日本大使館・総領事館、日本藝術院、日展会館、成田山書道美術館、首相官邸、全国著名社寺ほか多数。

Category

芸術

02

前期

茶の心
和・敬・清・寂

SEN Genshitsu

茶道精神が普遍的な平和思想である

千玄室

裏千家 前家元



講義概要

日本を代表する総合文化「茶道」の精神は「和」に代表されるが、この「和」の思想は、まさしく平和思想そのものであり、しかも特定の宗教や思想といった偏ったものではなく、価値や様式の多様化する国際社会の中で普遍性を有するものである。この茶道の精神と形が国際社会に果たす役割は大きいものがある。



Profile

第二次世界大戦の折、日本海軍特別攻撃隊の一員として死を覚悟しながらも終戦に至った。復員後に宗家で見た最初の光景は、父親である第十四代淡々斎宗匠が英語で米軍将校にお茶を教えている姿であった。将校が英語で厳しく指導され、真摯に日本の茶道を学ぶその光景に、ある種の敬意、憧憬の念を抱いた。日本は歴史的・文化的価値のある茶道文化を有しており、その家の継承者としての自覚を持って、国際社会に平和・和の心を布教することを決心。アメリカ留学等の経験を経て、60数カ国、350回以上の渡航を行い、形としての日本文化を世界中に定着させた最初の人である。単に茶道人としてだけでなく、日本社会・国際社会の中で文化人としての役割を追求しており、それらの功績に対して日本や世界から文化勲章をはじめとする多くの褒章を受けている。また茶道の学術的研究も行い、哲学博士・文学博士を取得している。

Category

芸術
03

前期

西洋美術の革新者たち

HIRAKAWA Kayo

ルネサンスの「巨匠」誕生のメカニズム



平川 佳世

京都大学大学院文学研究科 教授

講義概要

本講義では、美術史学の思考法や研究法を学び、美術史研究の最新の動向に触れることで、巨匠たちの創造行為の本質に迫ります。題材として取り上げるのは、15、16世紀、すなわち、西洋美術史の革新の時代です。「ルネサンス」と一般に呼ばれるこの時代には、イタリアやネーデルラント(現在のベルギー、オランダなどに該当)をはじめとするヨーロッパの各地で、まさに「巨匠」の名に相応しい才能あふれる芸術家たちが活躍しました。ファン・エイク、レオナルド・ダ・ヴィンチ、デュラナー、ラファエロ、ミケランジェロ…。本講義では当時の「芸術家育成システム」に着目しながら、彼らの類まれな才能の本質、その「独創性」と「革新」の本質に迫ります。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

ウィズ・コロナ、SDGs、デジタルトランスフォーメーション…。未来へと続く持続可能な社会の構築のため、今日の私たちには、新たな時代を切り開く柔軟な発想とそれを実現する能力が求められています。しかし、こうした才能は「天賦の才」なのでしょうか、それとも、自ら「育成する」ことが可能なのでしょうか。本講義では、西洋美術に地殻変動的な革新をもたらした「ルネサンスの巨匠たち」が、いかなる過程を経て、優れた着想と技術力を育み、新しい時代を切り開いていったのか、現存する絵画や素描、画家たちが残した言葉、当時の芸術論や教育論などを題材に考察します。それを通じて、現代に求められる「才能育成システム」について、模索します。

Profile

1991年京都大学文学部史学科(考古学専攻)卒業。ピクチャー音楽産業株式会社勤務を経て、1993年京都大学文学部哲学科(美学美術史学専修)に編入学、1995年同大学院修士課程に進学、2000年同大学院博士後期課程を研究指導認定退学。その間、1998年10月より1999年3月までウィーン大学に留学。博士(文学)(京都大学)。2001年、近畿大学芸芸学部講師に着任、助教授、准教授として2008年度まで教鞭をとる。その間、2007年9月より2008年3月まで、ローマ、マックス・プランク美術史研究所に研究滞在。2009年より京都大学文学研究科准教授、2014年3月より半年間、客員研究員としてトリア大学に滞在、2017年より現職。専門は北方ルネサンス絵画史。

The Pictorialization of Dürer's Drawings in Northern Europe in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, Peter Lang, 2009、中村俊春編『絵画にみる私的世界の表象』(『変容する親密圏/公共圏』第3巻)京都大学学術出版会、2012年(共著)、『スプランゲル作《最後の審判》——銅板油彩画の宗教的機能に関する試論』(『京都美術史学』第1号、2020年、所収)等。

異文化理解こそが 次世代社会の条件

Ussouby SAKO

グローバル化のなかの多様性と文化の役割を考える



ウスビ サコ

京都精華大学 前学長
人間環境デザインプログラム/
デザイン研究科(建築専攻) 教授

講義概要

グローバル化が急速に進むなかで、かつての文化的規範や国民国家という枠組みは揺らぎ始めています。これまでの共同体は解体され、個が中心となる社会が形成されます。いわゆる「ジャパンスタンド」や「ジャパシステム」が崩れ、物事の価値判断は一国のルールや政策では決めにくくなります。グローバル化によって変化した社会基盤は個を大切に、個々人は因襲的な束縛から解放されます。そこでは、人種、性別、宗教、性的指向、社会経済的背景、および民族性などを超えて、個と個が互いの違いを認め合うことが重要になります。異文化を受け入れることが苦手な日本人にとっては、あらたな、そして大きな不安となることでしょう。本講義では、グローバル化する社会の中で人間はどう生きるべきか、多様性と文化の役割について考えます。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

多様なバックグラウンドや属性を持つ人々が違いを受容し合うことがグローバル化される社会で生きる条件となります。世界中の人びとが集まるなかでは、多様性を大切にする必要があります。本講義と研修を通して、多様な文化と価値観を受容するとともに自己の文化を見つめ直し、そして新しい文化と社会を創造する力を身につけてもらいます。いつの時代にも世界にはさまざまな問題があふれていますが、わたしたちには明るい未来を作り上げるために、世界の多様性を知ることと異文化を理解する必要があります。特に、「個々が自分の立ち位置」をしっかり決め、「ブレない軸」を持つことが次世代の社会の中で生きる条件となります。本講義で獲得できる「知識」は、個々の受講生がこれから生きていくうえで大きな力となることを確信しています。

Profile

1966年マリ共和国に生まれる。高校卒業と同時に国の奨学金を得て中国に留学。北京語言学院（現・北京語言大学）、南京市の東南大学等に6年間滞りながら建築学を実践的に学ぶ。1990年東京で短期のホームステイを経験し、アフリカに共通するような下町の文化に驚く。

1991年3月に来日し、同年9月から京都大学大学院で建築計画を学ぶ。博士号取得後も日本学術振興会特別研究員として京都大学に残り、2001年に京都精華大学人文学部教員に着任。2013年には学部長。2018年4月同大学学長就任（～2022年3月）。現在の専門は空間人類学。

『知のリテラシー・文化』ナカニシヤ出版(2007年 編著)、『現代アフリカ文化の今』青幻舎(2020年 編著)、『「これからの世界」を生きる君に伝えたいこと』大和書房(2020年)、『アフリカ出身 サコ学長、日本を語る』朝日新聞出版(2020年)、『アフリカ人学長、京都修行中』文藝春秋(2021年)、『ウスビ・サコの「まだ、空気読めません」』世界思想社(2021)。

Category
人文科学
02
後期

人新世 (Anthropocene) を生きる

SUZUKI Shoko

科学技術のELSIと人間の使命



鈴木 晶子

京都大学大学院教育学研究科 教授
理化学研究所・PI

講義概要

技術文明を享受するだけでなく、その創造の担い手として人類がこれまで歩んできた文明化の過程を科学哲学・教育哲学の観点から掘り下げ、AI技術をはじめとする新たな技術文明の課題に焦点を当てる。技術文明への適応過程で、自らの能力や技能を更新し続ける人間の可能性と限界とは何か。また、18世紀以来の近代啓蒙の時代に構築された近代社会システムにおいてこれまで自明とされてきた基本的事柄は今後どのように変容していくか。本講義では、人新世(Anthropocene)を生きる人間にとって、環境、エネルギー、ゲノム、AIなど将来の世代を展望した長期的責任体系のもとでの技術文明の課題について、その基本的論点を取り上げ、受講生と議論できればと考えている。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

大きな変革期には、動物や機械との比較を通して、人間とは何か、また何を指して生きるべきか、生きることの意味を問う哲学に再び光が当たり始めている。技術文明の急速な進展にともなう不確実性を制御するために、科学技術をめぐる倫理的・法的・社会的課題(Ethical-Legal-Social-Issues: ELSI)の検討が喫緊の課題となっている。こうした法や倫理の標準化を目指す国際的議論とその社会実装における文化や宗教、習俗の多様性の尊重、イノベーションとレギュレーションの二項対立を乗り越える道を問うこと、その問いの質を上げていくことは、産官学いずれの領域においても「専門家としての私」と「世の一隅を照らす私人としての私」を統合していく要となるだろう。

Profile

専門は科学哲学、教育哲学、歴史人類学。伝統的なわざの修練にみる触覚知性や直観の働きの哲学的・歴史人類学的解明を通して、新たな学習論の構築に取り組んできた。2016年より理化学研究所革新知能統合研究センターで人工知能の倫理的、法的、社会的影響について研究プロジェクトを主宰。AI時代の技術文明のあり方や倫理について、OECDやユネスコでの議論に参加。総務省情報通信政策研究所特別研究員、総務省AIネットワーク社会推進会議幹事。ベルリン自由大学客員教授(2009-2010)。日本学術会議会員(2005-2014)、同連携会員(2014-2020)。

DWIH Coffee Talk #6「AIと倫理」 - YouTube

DAAD/DWIH記事 <https://www.dwih-tokyo.org/ja/2021/07/14/connecting-east-and-west-3/>

ユネスコAI円卓会議Shaping the Future of AI through Cultural Diversity - YouTube



東長 靖

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教授

講義概要

イスラームはとかく、頑迷・不寛容・過激・攻撃的といった印象を持たれがちである。このような一般的なイスラーム像は、戒律・イスラーム法を重視するアラブ諸国のイスラーム原理主義的な主張と密接に結びついている。本講義では、これと異なる、寛容で非暴力なもう一つのイスラーム像を提示してみたい。そのようなイスラーム理解は、非アラブ圏に広くみられる。イスラームといえば中東・アラブの宗教と考える人が多いと思うが、現在中東に住むイスラーム教徒は、世界総信徒人口の2割程度に過ぎない。また、このもう一つのイスラーム像が、しばしばスーフィズムに基づいていることも重要である。「イスラーム神秘主義」としばしば訳されるスーフィズムが、現代社会でいかに穏健イスラーム確立に貢献しているかを語ってみたい。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

私が学問をする時にいつも考えているのは、常識を打破するということである。そのために有用な手段として、時空間を異にするものを知ることが挙げられる。時間に関して言えば歴史を遡ってみること、空間に関して言えば異文化を体験してみることがこれに当たるだろう。本講義では、イスラームという私たちにふだんなじみのない社会文化システムについて知って頂く。自分たちと違う常識をもつ人々や文化に触れた時に、ひとは自分の常識が世界の常識でないことに気づく。また、西洋近代中心の知のあり方に対しても疑問をもつようになる。そういった新たな視点を手に入れたうえで、地球規模で現在私たちが直面している諸問題を考え直す契機に、本講義がなれば幸いである。

Profile

1960年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。博士（地域研究）。イスラーム思想（とくにスーフィズム）が専門。中東地域を核としつつ、イスラーム世界を広く研究対象とする。文献研究とフィールドワークを共に用い、高度な形而上学から市井の民間信仰までを一つながりのものとして捉えられないか、模索している。著書に『イスラームのとらえ方』（山川出版社）、『イスラーム神秘思想の輝き—愛と知の探求』（山川出版社、今松泰との共著）、編著書に『岩波イスラーム辞典』（岩波書店）、『イスラーム世界研究マニュアル』（名古屋大学出版会）、『イスラームの神秘主義と聖者信仰』（東京大学出版会）、『中東・イスラームへの30の扉』（ミネルヴァ書房）、監修書にティエリー・ザルコンヌ（遠藤ゆかり訳）『スーフィー—イスラームの神秘主義者たち』（『知の再発見』双書152）創元社など。

Category
人文科学
04

後期

「しなやかさ」の系譜
稽古と無心

NISHIHARA Tadashi

ハプニングに対応する身心の土台



西平 直

上智大学グリーンケア研究所 特任教授
京都大学 名誉教授

講義概要

無心。本当はよくわからないのだが、なぜか皆、深い知恵を予感する。ではそこに何が潜んでいるのか。例えば、無心から生じる「おのずからの動き」。意図的に作り出すのではない。恩寵のようにやってくる。あるいは、型という知恵。型の稽古は「ハプニングに対応する身体」を育てる。そうした身心を可能にする土台を育てる。もしくは「身心一如」「離見の見」「修証一等」といった謎めいた言葉、そこに込められた先人たちの「しなやかな」教え。自然体、暗黙知、脱学習、アート、フロー、成就。「身をもって学ぶ(わざを身に付ける)」プロセスと、そこに秘められた豊かな知恵について学ぶ機会とする。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

稽古の思想は「しなやか」である。稽古は「わざ」が「わざとらしく」なることを嫌う。稽古は「上手くなろうとする」ことであると同時に「上手くなろうとしなくなる」ことである。「型」や「無心」の思想は逆説に満ちている。一筋縄では進まない。よじれ・もつれ・反転する。その秘められた「しなやかさ」を学ぶ。「しなやかさ」が即興を生み、創発の土台となる。新しい状況にそのつど対応してゆく身心の基礎・基本・土台。予測不能な時代であればこそ、伝統の知恵に立ち返り、そこから跳ね返される仕方、自分なりに考え直す機会としたい。

Profile

1957年、甲府市生まれ。信州大学、東京立大学、東京大学にてドイツ哲学と教育哲学を学び、1990年から立教大学文学部専任講師・助教授、1997年から東京大学教育学研究科助教授・准教授を経て、2007年から京都大学教育学研究科教授。専門は、教育人間学、死生学、哲学。思想研究による「人の一生(ライフサイクル)」研究を志し、宗教心理学・東洋哲学における「宗教性(スピリチュアリティ)」研究を継続中。近年は毎年ブータンに通う。

無心や稽古に関して、『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版会(2009年)、『無心のダイナミズム』岩波現代全書(2014年)、『無心の対話-精神分析フィロソフィア』創元社(2017年 共著)など。その他、『エリクソンの人間学』東京大学出版会(1993年)、『魂のライフサイクル-ユング・ウィルバー・シュタイナー』東京大学出版会(1997年)、『教育人間学のために』東京大学出版会(2005年)、『生涯発達とライフサイクル』東京大学出版会(2014年 共著)、『誕生のインファンティア-生まれてきた不思議・死んでゆく不思議・生まれてこなかった不思議』みすず書房(2015年)、『ライフサイクルの哲学』東京大学出版会(2019年)、『井筒俊彦と二重の見』、『西田幾多郎と双面性』(共に、ぶねうま舎、2021年)など。

Category
人文科学

05

後期

タイから考えるケアと老い、
そして自由

HAYAMI Yoko

高齢化社会に生きる個と
つながりを他文化に学ぶ

速水 洋子

京都大学東南アジア地域研究研究所 教授

講義概要

東南アジア諸国は、介護者などの送り出し元と思われがちだが、タイやシンガポール等一部の国々では既に高齢化が急速に進んでいる。東南アジアは、国家の制度や公的サービスが脆弱な部分を、家族やコミュニティを中心とした社会資本や相互扶助的なサポートが補っていると言われてきた。今でも老親のケアの担い手は基本的に子であるべきという規範は強い。しかし、少子高齢化とともに実際には家族では担いきれなくなっており、様々な綻びがみられるなかで、新しい工夫も始まっている。

社会規範としても実態としてもケアの実践が変わりつつあるなかで、老いはどの様に体験されているのだろうか。そこには、高齢先進国日本が学ぶべきことがあるのだろうか。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

日本は世界でも最も高齢人口比率の高い高齢先進国であり、タイで制度政策に関わる人々は日本の介護保険制度に学ぶべきであると様に述べる。しかし学ぶべきは彼らの側だけだろうか。先行した経験に基づく知恵を、後に続く国々と共有することはできるとしても、先を急ぐ中で見過ごしてきた道がないだろうか。また彼らが後から高齢化を体験するからといって我々と同じ道筋をたどるとは限らない。道は無数にあるだろう。だとすれば日本が、私たちが、社会の在り方や人の生き方についてタイから学ぶこともたくさんあるのではないかと。私が専攻する文化人類学や地域研究では、他文化について研究し、学ぶことは自分自身の日常や生き方、そして自分を取り巻く社会を顧みることを抜きにしてはありえない。特に今、閉塞する日本社会がこれからどのように歩いていくか、どの様に老いを生きるのか、自他の間で学べることは限りなく多い。

Profile

国際基督教大学教養学部卒業。ブラウン大学大学院(米)人類学博士課程修了(1992年PhD)。1997年より京都大学東南アジア研究センター(当時)に文部教官助手として着任しその後、東南アジア研究所准教授、教授、そして組織統合等を経て現在に至る。研究関心は、タイの少数民族における宗教と社会、ジェンダー、家族に始まり、その後ミャンマーでも調査を実施。ここ十年ほどタイや東南アジア社会におけるケアと老いに関心がある。

著書に『差異とつながりの民族誌 北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー』世界思想社(2009);Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen. Kyoto University Press and Trans Pacific Press (2004年)。編著に『東南アジアにおけるケアの潜在力—一生のつながりの実践』京大出版会(2019年);『人間圏の再構築:熱帯社会の潜在力』京都大学学術出版会(2012年共編);The Family in Flux in Southeast Asia: Institution, Ideology and Practice, Silkworm Press and Kyoto University Press(2012年共編);Gender and Modernity in Asia and the Pacific. Kyoto University Press & Trans-Pacific Press(2003年共編)など。

Category
人文科学

06

後期

禅と日本文化

MATSUYAMA Daiko

禅の教えとリーダーシップの醸成



松山 大耕

妙心寺退蔵院 副住職

講義概要

禅の本質は「不立文字」。つまり、物事の本質は言葉では表現できない、伝えることができない、ということだ。実践体験を通して、核心を伝えていく。禅は単なる瞑想の手段ではない。「行住坐臥」寝ているときも、歩いているときも、すべての瞬間が禅である。ひとつの生き方と言ってもよい。今回の講義では、文字では表現できないと言われる禅の本質をあえて言葉を使って表現しながら、その奥深さを味わうための入り口としたい。坐禅の実践とともに、禅が生み出した庭や茶など日本文化の精神性にも触れ、禅がいかに日本文化に影響を与えてきたかということも感じていただきたい。また、歴史上さまざまなリーダーが禅に影響を受けており、禅の教えとリーダーシップの関係にも注目する。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

いまや禅は日本だけではなく世界中で広く親しまれている。しかし、日本の禅と今、世界で流行しているマインドフルネスやZENとは違いもある。一番大きな違いは、日本の禅は功利主義的な思考をしない、ということだ。マインドフルネスをすれば、パフォーマンスが上がるのではないか、ZENを実践すれば健康的な生活が過ごせるのではないか。確かにそういう「ご利益」はあるかもしれないが、あくまでそれは「おまけ」であって本質ではない。そういった功利主義的な捉え方であれば、今、世界にさまざまな歪みを産んでいる資本主義的な考え方を強化するに過ぎない。それを抜けたところにすばらしい世界が広がっており、そういう存在があるということに気づいてほしい。

Profile

1978年京都市生まれ。2003年東京大学大学院 農学生命科学研究科修了。埼玉県新座市・平林寺にて3年半の修行生活を送った後、2007年より退蔵院副住職。日本文化の発信・交流が高く評価され、2009年観光庁Visit Japan大使に任命される。また、2011年より京都市「京都観光おもてなし大使」。2016年『日経ビジネス』誌の「次代を創る100人」に選出され、同年より「日米リーダーシッププログラム」フェローに就任。2018年より米・スタンフォード大客員講師。2019年文化庁長官表彰(文化庁)、重光賞(ボストン日本協会)受賞。2011年には、日本の禅宗を代表してヴァチカンで前ローマ教皇に謁見、2014年には日本の若手宗教家を代表してダライ・ラマ14世と会談し、世界のさまざまな宗教家・リーダーと交流。また、世界経済フォーラム年次総会(ダボス会議)に出席するなど、世界各国で宗教の垣根を超えて活動中。

『大事なことから忘れなさい～迷える心に効く三十の禅の教え～』世界文化社(2014年)、『京都、禅の庭めぐり』PHP(2016年)、『ビジネスZEN入門』講談社新書(2016年)

Category
社会科学

01

後期

「想定 の範囲内の 差異」 の向こう側へ

ISHII Miho

文化人類学を通して「あたりまえメガネ」を
外してみる

石井 美保

京都大学人文科学研究所 准教授



講義概要

近年、あちこちの大学や企業で、多様性の尊重や異文化理解の重要性が喧伝されている。他者理解やコミュニケーション・スキルの向上を目指すための講習なども盛んだ。だが多くの場合、そうした場で想定されている「多様性」や「異文化」は、言語や生活習慣の違いといった「想定内の差異」であるように見える。それらは目的合理性や自律性、効率性といった近代社会の前提を揺るがすものではない。他方で、文化人類学が目を見てきたのはそうした近代合理性の外側にあるものたちだ。たとえば呪術や儀礼、贈与にアナキズム。近代社会の基準でみれば、それらは意味のわからないもの、取るに足りないもの、ネガティブなものにも見えるだろう。だが、そうした物事のもつローカルな論理を追究することで、見えてくるものがある。それは、「この私」という強固な主体の座を「降りる」という可能性だったり、既存の国家や制度の妥当性を疑う姿勢だったりするかもしれない。この講義では、主に呪術や憑依にまつわる具体的な事例を取り上げながら、既存の制度や「この私」を維持・拡張していくような思考とは異なる、オルタナティブな実践や考え方への手がかりを受講生の皆さんとともに考えていきたい。

Profile

これまで、アフリカのタンザニアとガーナ、南インドで人類学的フィールドワークを行ってきました。タンザニアでは、「ラストファリ運動」と呼ばれる黒人運動と、この運動にかかわる都市出稼ぎ民の生活について。ガーナでは、多民族的な開拓移民社会における精霊祭祀と妖術、呪術について。そして南インドでは、「プータ祭祀」と呼ばれる憑依をともなう神霊祭祀について、調査を行ってきました。主な研究テーマは憑依・呪術・儀礼をはじめとする人々の宗教実践ですが、これに関連して、①村落社会における土地制度と母系制、②宗教実践と交易・商業との関係、③儀礼における身体性とパースペクティビティ、④神霊祭祀と環境運動、大規模開発の関係、⑤人間と非人間の社会的なインタラクション 等のテーマについても調査研究を進めています。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

目的合理性、自律性、効率性——私たちが知らない間に身につけ、内面化している近代社会の枠組みや規範をカッコに入れてみることで、世界の見え方はおのずと少し変わってくる。それは、「想定内の差異」の向こう側に出てみることで、自分と世界の「あたりまえ」をずらしてみることもある。フィールドワークで培われた身体感覚に根ざしつつ、自己のありようを揺さぶる他者との出会いを通して、私たちの日常を規定するさまざまな前提を相対化してきた文化人類学の思考法を学ぶことで、近代社会の「あたりまえ」に収まらない新たな発想や関係性へのヒントを見つけることができる。

Category
社会科学
02

後期

家族関係の多様化と 個人のアイデンティティ

NISHITANI YUKO

多文化主義の視点からみた
国家法と宗教規範の協働



西谷 祐子

京都大学大学院法学研究科 教授

講義概要

欧米では、多数のイスラム移民が中近東から流入する中で、本国でなされた一夫多妻婚や夫による妻の追い出し(タラーク)離婚などの効力を認めてよいか否か議論されている。日本でも、ミャンマー人のイスラム夫婦が国内でタラーク離婚を行い、その有効性が問われた事件がある。このように一国内で、多数派と異なる社会規範や宗教規範に従う者が増えてくると、いかにして受入国の基本的価値や社会秩序を維持しつつ、移民のアイデンティティを尊重して多文化共生を図るかが重要な課題となる。本講義においては、欧米での移民をめぐる家族関係の規律、及び国家法と宗教規範の協働について学ぶことで、今後日本においてどのように渉外的な家族関係を規律し、多文化主義を実現しうるかについて考察する。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

本講義に触れることで、イスラム教やユダヤ教などの宗教規範に根差した家族関係の規律のあり方について多角的に学ぶことができるほか、今後の日本の移民政策を考えるきっかけにもなると思われる。日本は、少子高齢化が進む中で人手不足を解消するため、多数の外国人労働者を受け入れてきたが、彼らの多くはコロナ禍の下で深刻な困窮状態に陥った。これは、日本が外国人に安定した滞在許可や社会保障等を確保せず、正面から移民政策の是非を議論しないまま、窮余の策として多数の外国人を受け入れてきた結果である。本講義を通じて、広く欧米での多文化主義をめぐる議論に触れることで、今後の日本が進むべき方向性を考えるきっかけとなるであろう。

Profile

京都大学大学院法学研究科・教授。東北大学准教授、九州大学教授を経て、2015年から現職。国際私法・比較法・家族法を専門とする。京都大学法学部卒業、同大学院法学研究科修士課程修了後、ハイデルベルク大学法学博士(1998年)。ドイツ、フランス、イタリア、オランダ、米国にて長期在外研究。デューク大学及びニューヨーク大学(米国)、チューリッヒ大学及びローザンヌ大学(スイス)、テルアビブ大学(イスラエル)、台湾法官学院等の客員教授を歴任(一部予定)。2020年フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞受賞。

https://cislp.law.kyoto-u.ac.jp/intl_research.htmlも参照。

Category
社会科学

03

後期

中国経済発展の本質と行方

LJU Deqiang

近代的制度と価値観なくして
近代国家なし

劉 徳強

京都大学大学院経済学研究科 教授

講義概要

中国の改革開放政策が実施されてから今年で44年。この間、中国は権威主義市場体制の下で急速な経済成長を実現し、世界第二の経済大国になり、一部の分野では世界の先端を走るようになった。しかし、ここに来て、この体制の限界が露呈し、国内外で様々な軋轢を生みだすことになった。中国経済はさらに成長し、日米欧並みの先進国になれるのか。本講義では、これまで中国経済が発展してきたメカニズムを検討し、中国経済や社会が直面している諸問題の原因を明らかにした上で、今後の中国経済成長の可能性を展望する。米中対立とそれが中国の経済成長への影響や、日中経済関係と日本企業の対中進出についても触れておく。

世の中をどのように変えるのか、
どんなインパクトがあるのか

今日の中国は政治的、経済的、そして社会的な問題が多く抱えているが、この中に、中国特有のものもあれば、経済発展の特定の段階においてどの国にも生じる問題もある。後者の問題については、経済のさらなる発展や社会の進歩を通じて解決すると期待できるが、前者の問題はその国の政治や歴史、文化に依存する可能性があり、経済発展によって解消できないだけでなく、経済発展そのものを阻害する可能性さえある。この講義では、中国の直面する問題の本質を明らかにすることで、中国の行方を展望することができる。

Profile

1980年北京大学経済学部入学。1982年来日し、東京都立大学経済学部へ入学。1991年一橋大学大学院経済学研究科博士課程理論経済学専攻修了。経済学博士。1991年東京都立大学経済学部助手。1992年東京学芸大学教育学部講師に就任、その後助(准)教授、教授を経て、2008年に京都大学経済学研究科教授。2009-2011年及び2021年から京都大学大学院経済学研究科東アジア経済研究センター長。2010年から数回中国経済学会(現中国経済経営学会)理事、2020年より会長。開発経済学の視点から、中国経済の発展メカニズムや経済発展に関連する諸問題を研究。りわけ中国経済の成長パターンの変換、国有企業改革、産業構造、労働問題、所得格差などの問題に取り組んでいる。

Category
自然科学
01

後期

においは薬になりますか

ITO Michiko

多勢の意見が必ずしも真理なのではない

伊藤 美千穂

国立医薬品食品衛生研究所生薬部 部長



講義概要

においは見えない、拡散するなど科学的取り扱いに難点がある上に、五感のひとつである嗅覚が記憶と強く結びついているということなど、サイエンスになりにくい要素を多く含んでいる。このため、においの薬理活性を動物実験等のいわゆる薬学的に汎用される方法で示すためにはいろいろと工夫が必要だった。他方、日本の法律では生薬の品質評価基準のひとつににおいを使う。漢方薬・生薬の世界では、においは医薬品の品質のものさしのひとつになるのである。

扱い方によって大きく捉え方が変わるにおいに期待できること、またにおいのある医薬品としての漢方薬・生薬類を日本はどう扱ってきたのかなど、においを端緒に、身近でありながらあまり知られていない天然物医薬品の裏の世界を紹介する。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

超高齢化社会に急速に変容していく日本では、介護を必要とする人口とそれに伴う医療費の急増、高止まりなどが予想され、健康自己管理、健康寿命の延伸の必要性などが強く言われるようになってきている。セルフメディケーションとして品質保証がしっかりなされた一般用医薬品を上手に利用しつつ、より手取りやすい天然物医薬品や健康食品などがさらに活用されることが期待される。においを利用する商品は雑貨の区分で扱われることが多く、手軽さに大きく利点がある反面、医薬品と異なり、品質保証・品質管理の面では注意を要する。ポイントを抑えつつ、医薬品のみならず、雑貨や食品などに分類されるものも上手に利用することで、より豊かで健康な日常が手に入るのではないだろうか。

Profile

1969年大阪生まれ。1988年神戸女学院高等学校卒業、京都大学薬学部入学、1992年同大学薬学部卒業、1994年同研究科修士課程薬学専攻修了、博士後期課程に進学、1996年同課程を中途退学、京都大学薬学部助手に採用される。1999年博士(薬学)の学位取得。2002～3年米国ワシントン州立大学生物化学研究所に博士研究員として留学、2003年京都大学大学院薬学研究科助教授(2007年に准教授に名称変更)、2022年より国立医薬品食品衛生研究所 生薬部 部長。専門分野は生薬学・薬用植物学。特に、精油成分生合成研究、においの生薬薬理学的検討、薬用植物の栽培研究、生薬・天然物のレギュラトリーサイエンス、フィールドワークを軸とした伝統医薬の調査研究など。大学での教育研究の傍ら、厚生労働省薬事食品衛生審議会委員や医薬品医療機器総合機構日本薬局方原案審議委員会生薬等委員会委員、日本学術会議連携携会員、また各種学会の理事、評議員、代議員等の活動も。研究のため、また国際学会やWHO、ISO等の国際会議出席のための出張が多く、途上国から先進国まで海外経験は豊富。2006年日本生薬学会学術奨励賞、2012年第37回漢方研究イスクラ奨励賞、2016年国際薬学連合Fellow award、2017年第29回日本東洋医学会奨励賞受賞、2021年令和3年度日本生薬学会学術貢献賞受賞。

Category
自然科学
02
後期

機械学習

KASHIMA Hisashi

自ら学習する人工知能の仕組みと応用



鹿島 久嗣

京都大学大学院情報学研究科 教授

講義概要

三回目といわれる今回の人工知能ブームにおいて、機械学習、より広い意味ではデータ解析技術は中核的な役割を担っているといえます元々は人工知能研究の一分野として始まり、知識獲得のボトルネックを解消するための解決策として期待された機械学習は、ビッグデータやIoTといった近年の社会的要請を背景に大きく飛躍しました。現在では多くのプレイヤーが機械学習を競争力の源泉として位置づけようとしのぎを削っている一方で、メディア等では一部のセンセーショナルな側面のみが強調され、人工知能や機械学習に対する過剰な期待や過信があることも否めません。本講義で機械学習の基本的な考え方や方法論について初歩から解説するとともに、深層学習や集合知の利用などの近年の動向についても紹介していきます。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

前述したように、機械学習は現在の人工知能の中核となる技術であり、様々な分野で大きなインパクトをもたらしつつあります。特に、機械学習をはじめとするデータ駆動の考え方は、新たなサービスやシステムを開発するにあたり、発想の幅を大きく広げることに役立ちます。また、昨今のブームによって、何でもできるかのように喧伝されがちな人工知能技術の可能性と限界を大まかに理解しておくことは、「人工知能」という流行語に振り回されず、適正に利用をするうえで必須といえるでしょう。

Profile

1997年京都大学工学部数理工学科卒業。1999年京都大学大学院工学研究科応用システム科学専攻修士課程修了。2007年京都大学大学院情報学研究科情報学専攻博士課程修了。博士(情報学)。1999年から2009年までIBM 東京基礎研究所勤務。2009年より京都大学大学院情報理工学系研究科数理情報学専攻准教授。2014年より京都大学大学院情報学研究科情報学専攻教授。2016年より2020年まで理化学研究所 革新知能統合研究センター ヒューマンコンピューションチーム チームリーダー(兼任)。人工知能、特に機械学習、データマイニング等のデータ解析技術の研究開発とその実社会応用に従事。近年では、人間と機械による協働問題解決(ヒューマンコンピューション)にも注力、2009年情報処理学会 長尾真記念特別賞、2012年マイクロソフトリサーチ日本情報学研究賞、2013年船井情報科学振興財団 船井学術賞ほか多数受賞。

Category
自然科学
03
後期

気体の科学と技術

KITAGAWA Susumu

新しい多孔性材料による「霞（水蒸気、空気）を食って生きる」未来を展望する



北川 進

京都大学高等研究院 特別教授
物質－細胞統合システム拠点 拠点長

講義概要

ナノサイズの空間を持つ物質は我々の周りに溢れており、貯蔵、分離、触媒など生活に密着する用途に用いられ多孔性材料として良く知られている。代表物質である活性炭は古代エジプトにおいて医療用に用いられたことがパピルスに記述されており、現在においても水の浄化など幅広く用いられている。人類がその活性炭を発見したのち3000年を経て、18世紀に当時の新しい多孔性材料として天然鉱石から無機物であるゼオライトが発見され、20世紀前半の人工合成の成功を経て、石油産業をはじめとして人類の産業に大きな進歩をもたらした。このように既存の多孔性材料は、人類の生活に不可欠のものとして長年にわたって利用されてきた。もし、活性炭やゼオライトが担ってきたナノ細孔による機能を凌駕するような、貯蔵、分離などの機能を有する、あるいはまったく新しい多孔性機能を有する材料が発見されれば、人類の生活に革新的な変化をもたらす事が期待される。この革新的材料を生み出す空間の化学を紹介し、身の回りの気体がかかわる現代の課題（地球環境、エネルギー、医療、健康）への挑戦について述べてみたい。

Profile

1974年京都大学工学部卒業、1976年京都大学大学院工学研究科修士課程修了、1979年京都大学大学院工学研究科博士課程修了。1988～1992年近畿大学理工学部助教授、1992～1998年東京都立大学理学部教授、1998～2017年京都大学大学院工学研究科教授、2007～2012年京都大学物質－細胞統合システム拠点副拠点長・教授、2013～2016年京都大学物質－細胞統合システム拠点拠点長・教授、2016～2018年 京都大学高等研究院副院長、2016年より京都大学 高等研究院物質－細胞統合システム拠点拠点長、2017年より京都大学高等研究院特別教授。2009年日本化学会賞、2010年トムソン・ロイター引用栄誉賞、2011年紫綬褒章、2013年京都大学孜孜賞、2013年英国王立化学会フェロー会員、2013年江崎玲於奈賞、2016年日本学士院賞、2016年米国化学会パンロ賞、2017年藤原賞、2017年ソルベイ未来化学賞、2018年Grand Prix of the Fondation de la Maison de la Chimie など多数受賞。2019年学士院会員。新規多孔性材料であるMOF研究の先駆者であり、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の吸着など広範な未来用途に用いられる可能性がある新規材料、多孔性配位高分子(PCP) (または有機－金属構造体(MOF))を開発した。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

炭素資源およびエネルギー資源として重宝してきた石炭、石油や天然ガスはいずれ尽きる。地下資源代替として、ユビキタスな物質の利用(例えば空気や河川、海の水)が究極である。実現すれば日本はもはや資源のない国とは言わないであろう。そのためには気体を自在に操作する科学の創成、その技術の発展が不可欠である。東洋では、「仙人は霞(水蒸気、空気)を食って生きる」と言われる。まさに空気、水を原料として身の回りのものができる未来、私たちが仙人となることはあながち空想ではないように思える。

Category
自然科学
04
後期

尊厳ある生を支える緩和ケア

TAMURA Keiko



田村 恵子

京都大学大学院医学研究科
人間健康科学系専攻 教授

講義概要

わが国の緩和ケアは、これまでがん医療を中心に発展してきました。しかし、現在では、緩和ケアはがんだけでなく、末期心不全や呼吸不全、腎不全など重篤な病を患う人にも適用されるようになりつつあります。緩和ケアは、身体的・精神的症状の軽減を主とする症状マネジメントに焦点が当てられることがほとんどですが、その本質は病むことや死と向かいあうことを余儀なくされることに苦悩し、これからの人生をどう生きるかについて思い悩む人に寄り添い、一緒に考えていくことにあります。病むことや死と向かいあうことなど人としての根源的な苦悩(スピリチュアルペイン)について、互いに聴き、聴きあう「対話」を通して考えてみましょう。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

緩和ケアの本質は、究極の孤独ともいえる状況で苦悩する人に寄り添い続け、一人ぼっちにしないことです。特に、スピリチュアルケアは人生の旅路を辿る人にどう寄り添うか、どのような寄り添いが不安や恐怖を和らげられるかについて探求する営みです。これまで、このような問いは宗教や哲学が取り組むべき課題とされてきました。しかし、緩和ケアが浸透することで、その人の全人的な苦悩が和らぎ、死は生と一体であることに気づくようになりました。死を含む生に焦点があたるようになり、人は何を大切にしようとするかについての探求を始めています。死は単に生理的な出来事ではなく、生にとり不可欠であることが認知されるようになりつつあります。

Profile

1996年聖路加看護大学大学院看護学研究科修了。1997年がん看護専門看護師認定を取得。わが国における末期がんに対するホスピスケアの草分けである大阪市・淀川キリスト教病院で1987年より27年間務め、約6000名を超える看取りに向き合う。2006年大阪大学大学院医学系研究科修了(医学博士)。2014年1月より現職。2015年7月より、地域で生活するがん患者や家族、市民が対話を通して聴きあい、生きる知恵や支え合う力を育む市民活動「ともいき京都」を創始し、ケアリング・コミュニティづくりを目指している。ホスピスでがん患者を最期まで看取り、家族の看護にも取り組む姿がNHK「プロフェッショナル仕事の流儀」で2008年に放映された。代表的な著書に「余命18日をどう生きるか」(朝日新聞出版)『看護に活かすスピリチュアルケアの手引き第2版』(青海社)、『共に生きるスピリチュアルケア』(創元社)などがある。

「その人である」ことへの支援
重篤な病を患う人の

Category
自然科学
05

後期

有人宇宙活動

DOI Takao

人類の宇宙展開は何をめざすのか



土井 隆雄

京都大学大学院総合生存学館(思修館) 特定教授
宇宙飛行士

講義概要

1961年ガガーリンによる人類初の有人宇宙飛行以来、宇宙は人類にとっての進出可能な新世界となった。日本の『第一期有人宇宙活動』は、1985年に国際宇宙ステーション計画への参加決定及び第一次材料実験に参加する日本人宇宙飛行士の選抜により始まった。日本は短期有人宇宙ミッションを通して、宇宙実験技術、ロボットアーム操作技術、船外活動技術など有人宇宙活動に必須な技術を獲得した。『第二期有人宇宙活動』は、2008年「きぼう」日本実験棟を宇宙ステーションに取り付けるミッションを契機に始まった。日本人宇宙飛行士による長期ミッションが開始され、宇宙飛行士訓練、有人宇宙施設の運用、宇宙貨物船の飛行などの技術を獲得した。日本そして世界の有人宇宙活動は何をめざし、私たちはどこに行こうとしているのだろうか。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

霊長類の祖先がかつて森林からサバンナへ進出したことが人類進化を誘発したように、地球を離れ宇宙をめざす有人宇宙活動は進化の一形態とも考えられる。そう遠くない未来、人類は宇宙空間をも居住空間とし、そこに新たな社会を創造するだろう。私たちは、今、宇宙を切り開く有人宇宙活動のための新しい総合科学を「有人宇宙学」と名付けることにしよう。それは、人類が宇宙に展開していくことを記述できる学問である。有人宇宙学の創出は、「ソーシャル・ハビタビリティ(人間社会の存在可能条件)」という宇宙に持続可能な人間社会を構築するための新しい指標の確立・体系化を可能にする。「ソーシャル・ハビタビリティ」は、物理的・生化学的条件のみでなく、技術やそこに居住する人類のコミュニティの制約条件によって左右される社会存在の限界を定量的に決定する新たな指標である。

Profile

1954年、東京生まれ。1983年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。2004年、ライス大学大学院博士課程修了。工学・理学博士。1997年、スペースシャトル「コロンビア号」に搭乗し、日本人として初めての船外活動を行う。2008年、スペースシャトル「エンデバー号」に搭乗。ロボットアームを操作し、日本初の有人宇宙施設「きぼう」日本実験棟船内保管室を国際宇宙ステーションに取り付ける。2009年から2016年にかけて、国連宇宙部で国連宇宙応用専門官として宇宙科学技術の啓蒙普及活動に取り組む。2016年4月より京都大学宇宙総合学術研究ユニット特定教授に就任。2002年と2007年には超新星を発見する。2016年4月より京都大学宇宙総合学術研究ユニット特定教授に就任。2020年4月より京都大学大学院総合生存学館(思修館) 特任教授、2020年7月より特定教授。



益田 玲爾

京都大学 フィールド科学教育研究センター
舞鶴水産実験所 教授

講義概要

京都府北部の舞鶴湾で、毎月2回の潜水調査を2002年から継続している。海の中にも四季折々の変化があるとともに、温暖化の傾向も見てとれる。加えて、高浜原子力発電所に近い福井県の高浜町音海(おとみ)では、2004年から継続して潜水し、原発の稼働中は冬にも南方種の優占する様子を観察してきた。原発の抱える問題について考えさせられるとともに、温暖化の進んだ50年先の日本海の一つの姿を見た気がした。さらに、気仙沼市舞根湾では、2011年5月から継続して潜水している。津波後に回復してきた海の生物たちには、生態系の持つ強靭さを教わった。海の中には多様な生物が生息しており、これらがどのようにつながっているかを理解することが、管理と保全の要と考えている。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人類は有史以前から海の恵みに大きく依存してきた。この先の人類の歩みにも、海洋のもたらす恩恵は不可欠であろう。海を直接観察して得られる知見は、海が持つ生産性を理解し、これを適切に管理する上で示唆を与えてくれる。海洋生物資源の管理は、我々はどうに魚を食すべきか、という問題でもある。そこで、魚の食べ方について提案することで、生物資源の利用を、自分の周りから変えたいと思っている。一方で、潜水で得られた着想をもとに、海の生物を飼育して観察し、行動のからくりをさぐる「魚類心理学」的な研究も進めている。魚類の行動観察で得られた知見には、ヒトの行動理解に通じるものもあるかもしれない。

Profile

1965年、横浜市に生まれ、以後首都圏・関西・名古屋の大都市圏を2年ごとに転居。1985年、静岡大学理学部生物学科に入学。ダイビング部に入り、海の生物について幅広く学ぶが、これが過ぎて留年。1990年、東京大学農学系研究科に進学し、海洋研究所にて塚本勝巳教授の指導を受け、シマアジの群れ行動について研究。1996年から2年間、日本学術振興会海外特別研究員としてスコットランドのダンススタッフネージュ海洋研究所に留学し、ニシンの行動について研究。1998年、ハワイのオーシャンニック・インスティテュートに研究員として就職。魚類の行動研究を栽培漁業に応用する過程で、魚類の学習能力を調べる実験に着手。2000年4月、京都大学水産実験所に助手として着任。2003年助教授、2014年舞鶴水産実験所長、2020年教授。趣味は、ダイビング、ランニング、テニス、料理、ピアノ。舞鶴水産実験所には、保育園児や小学生からシニアまで、幅広い年齢層の方が訪れるため、それぞれに対し、潜って見てきた魚の話や魚の食べ方の話をしている。

Category
自然科学
07
後期

免疫システムから 老年病を考える

MINATO Nagahiro

高齢化社会—老化の生理と病理をめぐって

湊 長博

京都大学 総長



講義概要

老化の定義はむずかしいが、生物には種に固有の寿命（ライフスパン）があり、その時間軸に基づく個体の変化として考える限りそれは生理である。他方、加齢に伴い諸組織の機能障害が病的に顕在化することがあり、加齢随伴疾患（老年病）と総称される。加齢に伴い最も大きな質的変容を示す組織は免疫システムであり免疫老化といわれる。免疫老化自体は免疫システムの恒常性維持のために不可避の生理プロセスだが、近年これが様々な老年病発症の重要な素因となっていることが示唆されてきている。本講義では免疫システムの視点から、最新の知見に基づいて老化は生理か病理かというむずかしい問題にアプローチし、議論を深めたい。

※講義では、内容が一部変更になる可能性があります。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

人口の高齢化の進行は、いまや地球上のほぼ全ての国の不可避的現象である。特に日本はその先陣をきっており、2050年の老年人口（65歳以上）の割合は、35%以上と予測されている。この社会全体への影響は甚大である。ひとつは社会経済の仕組みそのものへの影響で、抜本的な再構築を余儀なくされるであろうし、同時にこれに伴い、各年代の個々人の生活様式も不可避的に大きな変容を迫られることになる。このような背景の中で、老化の生物学と老年病についての理解を深めることは、それへの社会の対応を考える上で、単なる医学を越えた本質的な課題と考えられる。私たちは人間の生理と病理の境界で多くの困難な決断と合意を迫られることになるだろう。

Profile

医学博士（京都大学）。専門は免疫学。1975年京都大学医学部卒業。米国アルバートアインシュタイン医科大学研究員、自治医科大学内科助教授等を経て、1992年京都大学医学部教授。2010年京都大学大学院医学研究科長・医学部長、2014年京都大学理事・副学長、2017年よりプロボストを務めた後、2020年10月より第27代京都大学総長。免疫細胞生物学の多彩な基礎研究を展開、220編余の英文原著論文を発表。2018年度ノーベル生理学・医学賞受賞者本庶佑教授の共同研究者として新しいがん免疫療法の開発にも貢献。2014年JCA-CHAAO Award、2016年創薬科学賞、2018年岡本国際賞など受賞。

Category
自然科学

08

後期

数学的思考力とは何か

MORI Shigefumi

予測不能な時代に必要となる
数学的な考え方を身につける



森 重文

京都大学高等研究院 院長 特別教授

講義概要

数学は一般の方からは、その名前のため数の学問だと思われがちです。科学技術を記述する言語だと言われれば良い方ですが、実はアイデアを記述する言語でもあります。それ故に、発想・思考する学問であり、芸術にも繋がります。

社会が安定的に発展していた時代には、仕事の上で経験を基にして判断・決定できる場合が多かったかも知れません。しかし、21世紀になってからは未経験な出来事が頻発し、将来はその傾向が更に強まると予想されています。従って、数学的な思考力に基づいた論理的な考察を加味することが必要ではないでしょうか。

本講座では、論理・発想を科学してみたいと思います。具体的な例に基づいて数学的思考力とはどんなものかお話ししたり、数学者がどのように研究対象を捉えるのか、科学と芸術の似た点・異なる点などについてご説明したいと思います。

Profile

1951年愛知県名古屋市生まれ。1973年京都大学理学部卒業。1975年京都大学大学院理学研究科修士課程修了、理学博士（京都大学）。1975年京都大学理学部助手。1980年名古屋大学理学部講師。1982年名古屋大学理学部助教授。1988年名古屋大学理学部教授。1990～2016年京都大学数理解析研究所教授。2011～2014年京都大学数理解析研究所所長。2016年より現職。外国滞在歴として、ハーバード大学助教授（1977～1980年）、プリンストン高等研究所（1981～1982年）、コロンビア大学客員教授（1985～1987年）、ユタ大学客員教授（1991～1992年）など。専門は代数幾何学の研究。ハーツホーン予想を解決した論文は、数学の歴史に刻まれる功績となった。この論文を手がかりにした「森理論」（代数多様体の極小モデル理論）で1990年にフィールズ賞受賞。2015年～2018年アジア初の国際数学連合総裁。井上學術賞（1989年）、アメリカ数学会コール賞（1990年）、日本学士院賞（1990年）、フィールズ賞（1990年）、文化功労者（1990年）、米国芸術科学アカデミー外国人名誉会員（1992年）、日本学士院会員（1998年）、藤原賞（2004年）、名古屋大学特別教授（2010年）、ロシア科学アカデミー外国人会員（2016年）、米国科学アカデミー外国人会員（2017年）、日本数学会賞小平邦彦賞（2019年）、京都市文化賞特別功労賞（2020年）、文化勲章（2021年）など。

Category
自然科学
09

後期

脳のネットワーク

WATANABE Dai

脳の動作原理の解明に向けて

渡邊 大

京都大学大学院医学研究科 教授



講義概要

生物を取り巻く環境は、一定ではなく時々刻々と変化する。したがって生命の危険につながる外界の変化に対して迅速に対応する能力は、生物にとって極めて重要である。環境は多種多様な要因が複合的に作用するため、その変化は複雑であり正確に予測することは困難である。生物はこのような不確定な未来へ対処する情報システムとして脳を発達させてきた。脳は、神経細胞から構成されるネットワークであり、その動作を介して、情報を収集し、統合的に分析を行い、柔軟に意思決定を下すことで、危機を回避しようとする。しかもこの神経細胞のネットワークは、自己組織的にアップデートし、適応的に能力を高めることができる。本講義では、脳が神経細胞のネットワークであるという観点から、脳の本質について考察し、さらにその病態解明や応用に向けたアプローチについて理解を深める。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

脳のネットワークの研究が進展することで、生物学や医学にとどまらず、様々な自然科学領域に波及効果があり、その発展に寄与する。脳疾患の診断・治療法の開発、革新的なロボット技術や人工知能を可能にする情報テクノロジーの創出など、社会や経済の発展につながると期待される。さらに「人間とは何か」という根源的な問いに迫るためにも、人間らしい考えや心の基盤となる脳の動作について理解することは重要であり、人文・社会科学の広い領域にも資することが期待される。

Profile

1990年 京都大学医学部医学科卒業。1997年 京都大学大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)。1997年 京都大学医学部助手、2003年 米国カリフォルニア工科大学博士研究員。2005年 大阪バイオサイエンス研究所システムズ生物学部門副部長を経て、2006年 京都大学大学院生命科学研究所認知情報学講座・医学研究科生体情報科学講座教授兼任。2014年より医学研究科生体情報科学講座教授専任。

Category
複合領域

01

後期

「ごみ」は意外に雄弁だ。

ASARI Misuzu

ごみを通して暮らしや社会を見つめる



浅利 美鈴

京都大学大学院地球環境学学 准教授

講義概要

人という人、世の中の誰もが出すと言っても過言ではないのが「ごみ」です。

講義に参加される皆様も、多かれ少なかれ、日々出されているはずで。

少し目を向けて頂ければ、そして、耳を傾けて頂ければ、その不思議や悩み、矛盾や葛藤から、目を離せなくなるでしょう。

そう、何と言っても「ごみ」とは、人間の価値観による産物だからです。

人、場所、時代…様々な要因で変わる「ごみ」の世界に、ご一緒に頂けませんか？

ごみは、可能性にもあふれています。この匂い、吸引力、人が生み出す生々しさ…それだけではありません。実は、脱炭素社会の実現に向けた切り札でもあるのです。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

持続可能な社会の構築に向けては、資源循環システムの構築が必須であり、「ごみ」の3R(リデュース・リユース・リサイクル)が行動指針となります。私の所属する研究チームでは、40年以上に渡って家庭ごみ等の組成調査を実施しており、様々な資源循環関連の施策立案の基礎情報を提供してきました。最近では、持続可能な開発目標(SDGs)においても取り上げられている食品ロスや、プラスチックごみ問題などに注目が集まり、解決に向けた研究が急がれています。今後は、脱炭素・炭素中立も念頭においた製品作りや資源循環、サーキュラーエコノミーの構築に向けて、実践も伴う研究展開が求められています。

Profile

京都大学大学院工学研究科卒。博士(工学)。京都大学環境科学センター助教を経て京都大学地球環境学学准教授。

「ごみ」が一つの大きな研究テーマ。ごみから見た社会や暮らしのあり方を提案する。また、ごみや3Rの知識を身につけ、行動してもらうことを狙いに、毎年11月に「3R・低炭素社会検定」を実施。「環境教育」や「大学の環境管理」も研究テーマで、京都大学をフィールドに、全員参加型のエコキャンパス化を目指す「エコ〜るど京大」や「京都大学超SDGs研究ライトユニット」なども展開。また、ライフワークとして市民への啓発・教育活動にも力を注ぎ、百貨店を会場とした「びっくり!エコ100選」を8年実施。その後の展開として、資源エネルギー問題にアクションを起こす「びっくりエコ発電所」「びっくりエコ研究所」を運営。2019年から「京都超SDGsコンソーシアム」を立ち上げ、地域やフィールドでの実践活動を展開している。2021年には「京都里山SDGsラボ(こすと)」をオープン。

Category
複合領域
02

後期

『大切な問いに向き合う 問いのデザイン』

SHIOSE Takayuki

埋没させるも「問い」しだい
多様な個を活かすも

塩瀬 隆之

京都大学総合博物館 准教授



講義概要

「ロボットは意識を持ちうるか?」「社会がなくても心は存在するか?」など、わたしたちをより深い思考の海に誘う「問い」とはどのようなものか。多くの場合が「大切な問い」を無自覚にはとらえているにもかかわらず、向き合い方がわからないがゆえに塩漬けにしてしまう。多様性を活かし、一人一人の個の動機と経験を編み合わせたチームとして牽引するような次世代リーダーシップには、組織成員の心を揺り動かすような核心を突いた問いの投げかけが欠かせない。ダイバーシティの重要性を頭で理解しているとは言いつつも、腑に落ちないままでは成員の士気を高めることはできない。

本講義では、問いのデザイン手法や実例とから、受講生各自の専門領域で接する課題と向き合い、所属する組織をより創造的な対話関係を継続できるようなコミュニケーションデザインの習得を目指す。

世の中をどのように変えるのか、 どんなインパクトがあるのか

社会も組織もスイッチ一つでは何も変わらない。しかし、その成員となる個人一人一人が変わることが、大きな変革の種となる。アイデアの萌芽がすでにあつたとしても、同じ成員が、同じ会議の方法で、同じ評価方法を続ける限りは社会変革に結実しない。解決策は特別な才能に求めるのではなく、多様な個が埋没してしまう組織の仕組みをよく理解し、確かな観察眼と精緻な論理的思考を組み合わせることでその構造を丁寧に紐解くことである。

Profile

京都大学工学部精密工学科卒業、同大学院工学研究科修了。機械学習による熟練技能継承支援システムの研究で工学博士。ATR 知能ロボティクス研究所、慶応義塾大学SFC 研究所客員研究員など併任。京都大学大学院情報学研究所助教、京都大学総合博物館准教授を経て2012年6月退職。同7月より経済産業省産業技術政策課 課長補佐(技術戦略)。2014年7月京都大学総合博物館准教授に復職。NHK E テレ「カガクノミカタ」番組制作委員。日本科学未来館“おや?”“っこひろば”総合監修者。平成29年 文部科学省 中央教育審議会委員(数理探究)、平成30年より現在 経済産業省 産業構造審議会イノベーション小委員会委員、若手ワーキング座長、特許庁知財創造教育調査委員、文化庁伝統工芸用具・原材料調査委員、日本医療研究開発機構プログラムオフィサー、令和2年岐阜市教育委員会 不登校特例校設立準備アドバイザー、2025大阪・関西万博日本館基本構想有識者委員会座長ほか。平成29年度文部科学大臣表彰・科学技術賞(理解増進部門)、日本の人事部「HRアワード2021」書籍部門最優秀賞ほか受賞多数。著書に、『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』(学芸出版社、2020)、『未来を変える 偉人の言葉』(新星出版社、2021)

Category

芸術

01

後期

いけばなの美と哲学

IKENOBO Senko

いけばなにみられる日本の美意識と
精神性を造形から解く



池坊 専好

華道家元池坊 次期家元

講義概要

日本のいけばなは表面的な形や色の美しさに留まらず、植物のいのちの様に美を感じ、また人と自然とを関連づけて捉えるところに、その特徴が見受けられる。いけばなに於けるアシンメトリーな造形から日本の美意識を探り、その背景にある自然観について考える



Profile

2015年 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 博士後期課程修了(先端ファイブ科学専攻)。小野妹子を道祖として仰ぎ、室町時代にその理念を確立させた華道家元池坊の次期家元。日本いけばな芸術協会副会長も務める。いのちをいかすという池坊いけばなの心を通じた多彩な活動を展開。2013年にはハーバード大学においてワークショップを、またニューヨーク国連本部において献花を行なう。アイスランド共和国名誉領事。

Category

芸術

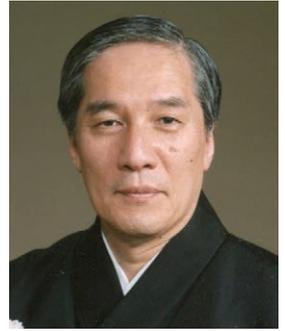
02

後期

能面が私達に語りかけてくるもの

KONGOU Hisanori

能面を通して、世界最古の演劇「能」の魅力に迫る



金剛 永謹

能楽金剛流宗家

講義概要

創生期より能の歴史と共に歩んできた能面。能面は能の生命であり、能役者にとっては能の精神を教えてくれる師匠のような存在である。その数奇な運命を辿り、能面について深く考察することにより、能の真髄を探っていく。



小面



増女



孫次郎



羽衣

Profile

1951年、二十五世宗家金剛巖の長男として京都に生まれる。幼少より、父・金剛巖に師事。1998年9月能楽金剛流二十六世宗家を継承する。2003年5月金剛能楽堂を京都御所の西向かいに移転、竣工。重要無形文化財総合認定保持者。

「舞金剛」と呼ばれる華麗で躍動感溢れる金剛流独特の芸風に、「京金剛」といわれる優美で雅やかさが加わった芸風を特徴とし、シテ方五流宗家の中で唯一関西を本拠地とする。

金剛流第一回の海外公演であるカナダ・アメリカ公演団長を皮切りに、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ロシアなどでの海外公演も多数行う。

京都市芸術新人賞、京都府文化賞新人賞、京都府文化賞功労賞受賞。京都市文化功労者表彰。第67回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。2018年紫綬褒章受章。

公益財団法人金剛能楽堂財団理事長。一般社団法人日本能楽会会長。

一般社団法人金剛能楽会代表理事。京都市立芸術大学客員教授。

著書に「金剛家の面」、「金剛宗家の能面と能装束」がある。

Category

芸術

03

後期

樂茶碗はなぜ黒いのか

RAKU Jikinyū

茶碗から見る日本文化のくくり

樂 直入

樂家十五代当主



講義概要

小学生が樂美術館をおとずれると、かならずする質問があります。「ここには、どうして、黒いお茶碗ばかりなべているの〜?」「おじさんも黒い茶碗つくっているのか?」「おじさんは、色きらいなん?黄色とかピンクとか緑とか」この本質的で素朴な問いに、どの様に答えればよいのでしょうか。「黒色は千利休と言うらしいお茶人の〈侘び茶〉の精神なの」と答えればよいのでしょうか。それとも、「黒はすべての色を含んでいる」とでも…。

この子供達の問いは日本文化の根底につながっています。

右に掲載の茶碗は「黒」ならず「白」。近作「White Rook」とよばれている茶碗。

「黒」「白」「赤」と、それはたんなる「色」ではない深い意味を負っています。



焼貴白巖石茶碗 銘 暁 2022年制作

Profile

樂家十五代当主。公益財団法人樂美術館 理事長、館長。公益財団法人金剛能樂堂 理事。公益財団法人佐川美術館名誉顧問。京都市立近代美術館評議員、十備会会員。1973年東京藝術大学彫刻科卒業後、イタリア留学ローマアカデミアにて学ぶ。1981年十五代吉左衛門襲名。1987年プリンストン大学ヴィジティングフェローシップ招待渡米。1992年通産省「感性社会研究会」委員。1994年淡交ヴェンナーレ審査委員。1995年土岐市「現代茶陶展」審査委員。2007年佐川美術館「樂吉左衛門館」の建築設計創案・監修を行う。2019年7月8日をもって樂家当主を長男に譲り「直入」と改名、戸籍を変更する。田部美術館大賞「茶の湯造形展」審査委員。1987年プリンストン大学・ヴィジティング・フェローシップ受賞（アメリカ・プリンストン大学）、日本陶磁協会賞、1988年京都市芸術新人賞（京都市）、1990年京都府文化賞奨励賞（京都府）、1991年京都美術文化賞（中信美術奨励基金）、1992年レオンドーロ賞（イタリア、ファエンツァ市・イ・フィオーリ）、日本陶磁協会賞金賞、1993年MOA 岡田茂吉賞優秀賞（MOA 美術館）、1997年第1回織部賞（岐阜県）、1998年第40回毎日芸術賞（毎日新聞社）、2000年フランス芸術・文化勲章シュヴァリエ受章（フランス政府）、京都府文化功労賞（京都府）、第3回茶道文化賞（裏千家今日庵）、第15回MOA 岡田茂吉賞大賞（MOA 美術館）、京都市文化功労賞（京都市）、京都府文化賞特別功労賞（京都府）など受賞多数。2015年「RAKU: THE COSMOS IN A TEA BOWL」展（国際交流基金共催）をロサンゼルス カウンティ美術館、サントペテルブルク・エルミタージュ美術館、モスクワ・プーシキン美術館にて開催。2016年「茶碗の中の宇宙 樂家一子相伝の芸術」展 京都国立近代美術館、東京国立近代美術館。「無限の宇宙一掌中を超えて」京都国立近代美術館コレクション展にて企画・出品など、その他多数。

主な著書に『「樂吉左衛門」陶VOL93』京都書院（1993年）、『茶道具の世界 樂茶碗』淡交社〈共著・責任編集〉（2000年）、『茶道具の世界 和物茶碗』淡交社〈共著・責任編集〉（2000年）、『樂焼創成・樂ってなんだろう』淡交社（2001年）、『茶室をつくった 5年間の日々を書き綴った建築日誌』淡交社（2008年）、『ちゃわんや 二人の息子と若き人々へ』淡交社（2012年）、『定本樂歴代』淡交社（2013年）、『月と華 宗入と乾山 元禄を生きた雁金屋の従兄弟ども』樂美術館（2014年）、『RAKU: A Legacy of Japanese Tea Ceramics』共著・樂篤人 青幻舎（2015年）、『茶碗の中の宇宙』ロシア語版 著書。共著・エルミタージュ美術館・プーシキン美術館編（2015年）、『光悦逍遥』京都新聞社朝刊連載 1年間 26回（2015年）、『Darkness and Light』共著・樂雅臣（2016年）、『光悦考』淡交社（2018年）、『観じる名碗』世界文化社（2018年）、『玉水焼一歴代の作品とその歴史一』淡交社（2021年）、その他著書多数。

発行者：京都大学ELP事務局

発行日：2022年4月

本書に記載されている内容を無断で転用・転載することを禁じます。



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

京都大学ELP事務局

〒606-8303京都市左京区吉田橘町1橘会館内

TEL:075-753-5158 / FAX:075-753-5154

URL:<http://www.elp.kyoto-u.ac.jp/>

Email:info@elp.kyoto-u.ac.jp